

- 上代語辞典編修委員会 一九九四 「あはれ」『時代別国語大辞典上代編』三省堂
- 曾倉 岑 一九六六 「記紀歌謡と説話」『国語と国文学』43—6
- 橋 守部 一九四一 『稜威言別』富山房
- 田中嗣人 二〇〇七 「ヤマト王権と出雲」『華頂博物館学研究』14
- 津田大樹 二〇一六 「哀傷表現の系譜——「はや」「はも」「あはれ」——」『古代和歌表現の機構と展開』新典社
- 土橋 寛 一九七二 『古事記全注釈—古事記編—』角川書店
- 一九七六 『古事記全注釈—日本書紀編—』角川書店
- 土橋寛・小西甚一 一九六八 『古代歌謡集』岩波書店
- 都倉俊一 一九七六 「景行天皇と倭建命—王権の正と負と—」『古代の英雄』有精堂
- 内藤 磐 一九九八 「出雲建が佩ける太刀—古代伝承世界の不思議—」『早稲田大高等学院・研究年報』42
- 直木孝次郎・西宮一民・岡田精司 一九七七 『日本書紀・風土記』角川書店
- 西宮一民 一九八五 『古事記』新潮社
- 野津将史 一九八七 「出雲建が佩ける大刀」小論『三田国文』7
- 畠山 篤 二〇一一 「倭建命の熊襲征討物語の生成（上）」『弘前学院大学文学部紀要』47
- 二〇一二 「倭建命の熊襲征討物語の生成（下）」『弘前学院大学文学部紀要』48
- 二〇二二 「山人・海人伝承と河内王朝—枯野琴と国栖奏に見る祭祀・服属と記紀の論理—」22世紀アート
- 福本雅一 一九七〇 「出雲建が佩ける太刀」『手塚山学院短大研究年報』18
- 前川明久 一九七六 「古代英雄物語の構造」『古代の英雄』有精堂
- 牧野正文 一九九〇 「崇神紀・出雲振根伝承における「時人」歌謡の機能—景行記との比較を通して—」『国学院大学大学院紀要（文学研究科）』21
- 松岡静雄 一九六三 『新編日本古語辞典』刀江書院
- 松前 健 一九八五 「ヤマトタケル伝承の成立」『大和国家と神話伝承』雄山閣
- 水野 裕 一九七二 『古代の出雲』吉川弘文館
- 三品彰英 一九七一 「出雲神話異伝考」『建国神話の諸問題』平凡社
- 三谷邦明 一九七六 「歌垣の歌（清寧記）」『記紀歌謡』早稲田大学出版部
- 守屋俊彦 一九八〇 「出雲建が佩ける刀」『古事記研究—古代伝承と歌謡—』三弥井書店
- 山口佳紀・神野志隆光 一九九七 『古事記』小学館

聖地との紐帯の強さ しかしそれでも、この歌謡が生まれ、うたわれ続けていた水の聖地（止屋の淵）との紐帯が強く、記紀の出雲建征討譚の舞台はその水の聖地から離れていない。

出雲の建部の語り部 出雲は地方国家としての独自性を長く持ち続け、軍事的にも重要視され、大和朝廷によって建部が設置されていた。そしてその建部には語り部があり、その出雲建部の由来を誇らかに語り続け、地元の語り部らしく出雲を統治する力の根源である水の聖地を重要視していた。すなわち、出雲を征討した倭建の伝承は中央の大和朝廷を圧倒的な勝利者にする服属伝承であったけれども、この地方の聖域にまつわる磁力から逸脱していないのは、この地元根差した語り部たちを支えた信仰的な原郷の根強さがあったからである。

そしてそうであればこそ、記紀に語られる出雲建征討譚・服属譚の舞台が出雲氏の執行する水辺の聖地であり、この征討譚・服属譚の中核がその聖地でうたわれ続けた〈出雲建の大刀の歌〉にあった事情をも示唆するものであった。

引用文献・参考文献

- 青木和夫・石母田正・小林芳規・佐伯有清 一九八二 『古事記』 岩波書店
- 秋本吉郎 一九六八 『風土記』 岩波書店
- 飯泉健司 二〇二〇 『王権と民の文学―記紀の論理と万葉人の生き様―』 武蔵野書院
- 飯田季治 一九七一 『先代旧事本紀校本』 明文社
- 今井昌子 一九九九 『時人の歌』 考』 『甲南大・古代文学研究』 5
- 上田正昭 一九六〇 『日本武尊』 吉川弘文館
- 小野諒巳 二〇一九 『出雲の掌握と刀剣讃美―「さみなし」歌の解釈から―』 『倭建命物語論―古事記の抒情表現―』 花鳥社
- 大久間喜一郎・居駒永幸 二〇〇八 『日本書紀「歌」全注釈』 笠間書院
- 大野晋・佐竹昭広・前田金五郎 一九七四 『岩波古語辞典』 岩波書店
- 萩原浅男・鴻巣隼雄 『古事記・上代歌謡』 小学館
- 尾畑喜一郎 一九八八 『古事記事典』 桜楓社
- 金光すず子 一九八八 『御子代部・御名代部』 『古事記事典』 桜楓社
- 神堀 忍 一九六〇 『古事記歌謡における挽歌的なもの―記紀歌謡における「あはれ」の語義をめぐって―』 『国文学（関西大学）』 28
- 倉野憲司 武田祐吉 一九六八 『古事記・祝詞』 岩波書店
- 西郷信綱 一九八八 『古事記注釈三』 平凡社
- 坂本太郎・家永三郎・井上光貞・大野晋 一九六八 『日本書紀上』 岩波書店
- 『日本書紀下』 岩波書店

れたことは、出雲振根の誅伐記事や神宝貢上のこと（『崇神天皇紀』など）によっても、更にこの地方の『風土記』が他の国のそれに比べて、著しく軍事的記事が多いことなどによってわかる」。してみれば地元の建部の語り部が、この出雲の史的な独自性を出雲の建部の由来譚に当然のこととして反映せざるをえなかったであろう。

十 結び

祭祀伝承 〈出雲建の大刀の歌〉の原形・祖形は、「弥（や）（八）つ芽（め）（藻）差す 出雲建が 佩ける大刀、黒葛多卷き 錆無しにあはれ。」で、出雲氏の水辺の聖地（止屋の淵）で靈威を身につけた出雲の国造「出雲建」が佩く大刀・神剣は、出雲に豊穰、健康、治平をもたらす、と讃美されている。この歌謡がうたわれるのは、決まって出雲氏の聖地（止屋の淵）であり、出雲の国造の就任式、あるいはこの聖なる地の水藻の繁茂する時に国造の靈威を改めて高めようとした祭祀儀礼であつたろう。

以上は、出雲氏だけで完結していた祭祀伝承のレベルでのことである。

服属伝承 しかし、歴史は地方が中央の大和朝廷に統轄される方向に進み、出雲氏も大和朝廷に服属せざるをえない段階になる。出雲の大神の神宝を献上せよという皇命が下り、それに従うべきか、否か、という出雲氏内の内紛が生じる。そして、朝廷の軍事介入によって、朝廷に服属することになる。以上の内紛・出雲建征討譚が、一連の服属伝承の一環として崇神紀に記されている。

この段階になると、〈出雲建の大刀の歌〉の原形は「錆無し」が「さ身無し」に改変されて、出雲建の佩く大刀が見掛け倒しの木刀であり、出雲建も同様に見掛け倒しの卑劣な者だという歌意にして、「時の人」がうたつたことにしている。ここに至って、本来出雲建とその所有する広範囲にわたる大刀の働き・効用を讃美する呪祷歌・独立歌謡は、その大刀の効用を無効にした物語歌謡にされたのみならず、さらにはその大刀を佩く出雲建が見掛け倒しであるとして「時の人」に批判させ、出雲氏の族長の權威を下落化させている。

この崇神紀の服属伝承と表裏をなすのが、『出雲国造神賀詞』である。すなわち、国造が交替することに当代の天皇に出雲の神宝を奉獻して天皇に寿を奏上するのは、この崇神紀の出雲建征討譚において出雲氏が朝廷に神宝を奉獻したことに発している、ともいえる。

歴史伝承 その崇神紀の服属伝承は、さらに景行天皇の時代のこととして歴史化される。すなわち、大和王権を代表するロイヤルヤクザの倭建と出雲王権の出雲建の対決という明確な構図をとる。倭建はまず当初はロイヤルらしく正々堂々と出雲建と渡り合うものの、最後の土壇場で持ち前のヤクザ振りを発揮してあつさり騙し討ちになっている。そして最後に倭建のうたう〈出雲建の大刀の歌〉も、以上のロイヤルヤクザの展開に即応して、四句までロイヤル風に相手の英雄ぶりを讃美しつつ、最後の結句で出雲建の所有する大刀が見掛け倒しであるとして、徹底したヤクザ振り・巨大な悪党振りを遺憾なく発揮し、出雲建を痛罵・嘲笑し、大和王権の絶対的な優位を誇っている。

歌謡の下落化 このように本来、出雲の繁栄を図る出雲氏の神剣の効用を讃美する格調の高い独立歌謡・儀礼歌が、朝廷側によって物語歌謡として完膚なきまで解体され、組み換えられて、下落化させられている。

説明であった。「建部」もその一類で、景行紀四十三年の条に「日本武の尊」の「功名を録へむとして武部を定む」とある。そして『記伝』以来、この「武部」＝「建部」は前述の御名代・御子代と解されてきた。

しかし、『日本武尊』『上田正昭』は全国各地に存在する「建部」を博捜し、次のように述べている。

日本武尊説話に結集する皇族將軍の征討によって、在地の有力軍事団が新しく建部としてくみいれられていったことを間接に傍証するものがあり、また逆に建部集団と中央との結びつきが、日本武尊なる人物の伝説化を促進する上に、なんらかのはたらきをおよぼしたことを推察させるのである。なぜなら日本武尊の東征・西征説話の展開する主な舞台が、建部の濃厚な分布地帯でもあるからである。

出雲の建部の設置 そして、この建部設置についての事情を知りうる好例として、『出雲国風土記』出雲の郡の健部の郷の条を挙げることができる。

健部の郷（中略）しかるに後に改めて健部と号くる所以は、纏向の檜代の宮に御宇しめし天皇、勅りたまひしく、「朕が御子、倭健の命の御名を忘れじ」とのたまひて、健部を定め給ひき。その時、神門の臣古禰を健部と定め給ひき。即ち、健部の臣等、古より今に至るまで、猶此處に居り。故、健部といふ。

景行天皇の時代に、出雲を平定した「倭健の命」の功績を称えて「健部」を創設し、神門の臣の「古禰」を健部とした、というのである。

『新選姓氏録』右京神別上によると神門の臣と出雲の臣は同族なので、「風土記」「秋本吉郎」の頭注は、『出雲国風土記』の「神門の臣古禰」は崇神紀六十一年の条で大和朝廷の四道將軍によつて誅殺された「出雲の臣の遠祖の出雲の振根」と同名とすべきであろう、と述べている。そうだとすると、崇神紀六十一年の出雲の臣の振根征討譚は素より景行記の出雲建征討譚とも異なる第三の服属・征討伝承もあった、と想定される。すなわち、倭建が出雲の振根＝古禰を征討して服属させ、彼をこの出雲地方の初代の「健部」の長に任命したという伝承があった、とすべきかもしれない。

地元の語り部 こうしてみると、右のような出雲の「健部」の由来譚が、出雲在住の「健部」の語り部によつて語られていた、とも想定できる。上田によると、出雲の郡の「健部」の郷には、語り部の「奈久矢売」がいるので、「建部設定の中で大きくうかんでくる、たけるの尊の説話が、これら語り部を介在することによつて、地方と中央の旧事世界が結合してゆくひとつのコースを推定しうる」ことになる。

場の磁力 こうしてみると、地元の建部の語り部が出雲氏伝来の〈出雲建の大刀の歌〉の原義を知りつつも、これを倭建の出雲建征討伝承に結びつけて王権に有利なように変容させていったという経緯も想定できる。したがつてこの語り部の語りは、出雲の聖地にまつわりつく場の磁力の影響下にあることになる。とすると倭建の出雲建征討譚は、中央の官人たち（あるいは中央の建部の語り部たち）によつてばかり語り直されたとはかりも言えないことになる。

上田も『日本武尊』で次のように指摘するように、「出雲地方が、地方国家としての独自性を長く持ちつづけ、その地方が軍事的にも重要視さ

雲建の大刀の歌〉(記23)の生成にも当て嵌まり、またこの歌をうたう英雄としての倭建のヤクザ的な性格を鋭く指摘している。

古代の共同体社会が崩壊し、歴史は古代王権の社会へと展開して行く。それは同時に古代祭祀の崩壊でもあり、祭祀の論理は王権によって反故にされてしまうのである。(中略)一般に、古代の英雄像の典型は、「景行記」の倭建命に見出すことが出来ると言われている。確かに、兄大碓命を、朝署に廁で、搦み批いで、その手足を引きもいで薦に包んで投げ棄てたり、女装して熊曾建兄弟を殺害したり、偽刀の策謀で出雲建を打ち殺す倭建命の姿には、巨大な悪としての英雄像が描き出されている(下略)。

4 場の磁力

場の磁力の強さ このように聖水の祭場から出雲建讃美の歌として誕生した儀礼歌の〈出雲建の大刀の歌〉の原形は、その主題を以上のように別物に変えられている。

しかしながら、それでもこの〈出雲建の大刀の歌〉はこの歌を生み出した母胎との紐帯が強く、記紀の出雲建征討譚の舞台は相変わらず聖水のほとりであった。祝福すべき儀礼歌の〈出雲建の大刀の歌〉の原形を生み出した出雲氏の信仰の原郷である聖水の霊場は、かほどにその磁場が強力であった。

この点、「崇神紀・出雲振根伝承における「時人」歌謡の機能——景行記との比較を通して——」「牧野」は、よく見抜いており、次のように述べている。

両者(論者注…景行記と崇神紀の出雲建征討譚)は同一の源(おそらくは出雲の肥河流域を伝承基盤としたもの)に発したものであり、歌謡も記紀に定着する以前、すでに何らかの関係を有して存在していたものと推測される。

須佐之男の草那芸の大刀の奉献 そして、このような朝廷と出雲の支配・被支配の史的な展開は、宮廷神話にも反映され、神代記において出雲王国の祖神ともいえる須佐之男の命が難儀して八岐の大蛇の尾から見出して手中にした神剣の「草那芸の大刀」を直ちに大和朝廷の祖神である天照大御神に献上している。出雲勢力が大和朝廷に服属する史的展開は、倭建の出雲建征討譚のみならず、宮廷神話にも大きな影響をもたらしているということであろう。

5 建部の働き

上田正昭説 『古事記事典』「尾畑喜一郎」の「御子代部・御名代部」の項「金光すず子」によると、「名代は天皇、皇后、御子女の名を後世に伝えるため、その名や宮号を付したものの、子代は皇子のない天皇の名を後世に伝えるために設けられた部民という」とあり、この記述がほぼ通説化した

ている、としている。すなわち、倭建の「大刀易^{たち}へ」の謀略によって出雲建が手にした木刀には「錆^{さび}もなく、すばらしいなあ」と皮肉な讃美・揶揄をあげている、と解しているのである。景行記の出雲建征討譚の基本的な構想・構造は、倭建の徹底したロイヤルヤクザで貫かれているので、前半部のロイヤル振りがぎりぎりの後半部で痛烈にヤクザ振りを発揮して出雲建を誅殺するというものである。したがって、この劇的な展開をもう一度集約した〈出雲建の大刀の歌〉で、上四句で出雲建とその佩^おびる木刀の鞘を讃美し、そしてさらに結句でその木刀に錆^{さび}の付きようがないことを誉めちぎることは、見事な褒め殺し・皮肉になり、これはこれでよくできた出雲建への嘲笑いになるだろう。

しかし、地の文における土壇場での大逆転が、歌謡では一本調子の讃め殺しになっていて、うまく対応していない。これでは歌語りとしての魅力が半減するのではなからうか。

敗れた建Ⅱ呪力のない大刀 確かに各建たちの所持する神剣には、国を統治する呪力が備わるものであった。すなわち、建とその所持する神剣は、常に讃美される等号関係にある、と考えられていたろう。これを裏返せば、統治力の弱さ・愚かさゆえに敗亡した建の所持した神剣は、敗亡した所有者と同様に呪力（統治力）を失ったなまくだと当然のこととして嘲笑されることになる。とすると、その神剣を知恵を用いて奪い取った倭建は言語感覚も鋭いので、負けた出雲建とその所持する木刀を褒め殺しにして痛烈に皮肉することは、あるいはありえることかもしれない。

しかし、右の〈出雲建の大刀の歌〉を出雲建への皮肉な讃美と解する説は、極めて手の込んだ近代的な解釈かもしれない。

3 下降する〈出雲建の大刀の歌〉

下降する〈出雲建の大刀の歌〉 こうしてみると、この歴史伝承としての景行記の〈出雲建の大刀の歌〉の転用のあり方は、応神記の〈国栖^{くす}の大刀の歌〉が、大雀^{おほささぎ}の命が仁徳天皇に即位するに至った朝廷の歴史伝承として晴れがましく改変されながら転用されたことと好対照をなしている、とわかる。すなわち、森に春・幸を招く呪歌としての〈国栖^{くす}の大刀の歌〉は、朝廷に入って後は王権を支える物語歌謡として上昇したのに対して、出雲の国に幸・治平などをもたらす呪歌としての〈出雲建の大刀の歌〉の原形は、朝廷に服属して以後は朝廷側から出雲の首長が見下される物語歌謡へと下落している。

出雲の儀礼歌の解体 以上、出雲氏の首長の英姿を讃美・祝福する出雲氏の晴れがましい儀礼歌が、朝廷側によって巧みに換骨奪胎されて支配者側から貶められて再編され、これによって朝廷側は圧倒的に優位に立っている。いわば大和朝廷は他人^{ひと}の禪で相撲を取りながら、次つぎと勝ち続けて大凱旋をしている、ということだろう。

朝廷官人の改変の営み 大和朝廷側は、このように独立した儀礼歌の原形を極力残しつつ（原形らしさを残さないと変形させた歌が存在する根拠を失う）、地の文（説話・物語）を加えることによって、その歌謡の本来の主題を解体させ、朝廷側にとって有利になるように改めて意義付けしていく。このように韻文には、元来その置かれた状況によって主題を容易に変えうる特性をもっている。歴代にわたる有能な朝廷官人たちによるこのような営みは、実に多大な成果を上げている、というべきである。

王権による古代祭祀の崩壊 この点、清寧記の歌垣の歌群（記105～110）を論じた「歌垣の歌（清寧記）」^{三谷邦明}の次の発言は、景行記の〈出

歴史伝承の体裁をもとっている。

「鏑無し」から「さ身無し」へ かしながら、本来出雲建の英姿を讃美する〈出雲建の大刀の歌〉の原形を一部分「鏑無し」から「さ身無し」に改変して〈出雲建の大刀の歌〉(紀20)に仕立て直し、「時の人」にうたわせ、出雲建＝振根の愚劣さ・卑怯ぶりを批判させるのは、文学的な営み・語りの手法であり、決して史実とばかりは言いがたい。

バ行とマ行が子音交替することは、例えば景行記の〈倭は国のまほろばの歌〉(記30)の「まほろば」(麻保呂婆)が、景行記の〈倭は国のまほろまの歌〉(紀22)では「まほらま」(摩倍邏摩)とあるところに見られる。そして、ビとミの子音交替することは、「蛇」が「へび」とも「へみ」とも発音するところに見られる。このビとミが交替しやすいことを巧みに用い、「さびなし」(鏑無し)を「さみなし」(さ身無し)にずらし、出雲建＝振根の神剣が見掛け倒しであり、何の靈驗・効用もないものにならってしまった。したがって、「あはれ」は①出雲建＝振根の愚劣のひどさ、あるいは②その偽大刀のために無残に殺された飯入根が気の毒だというように、物語に即して解されることになる。

景行記の出雲建征討譚 この点、景行記の出雲建征討譚では、より物語化が進み、ロイヤルヤクザを身上にする倭建の西征譚の一環として大和朝廷の核心部の歴史に拔擢され、景行天皇の皇子・倭建の命という皇族将軍が出雲建を征討したという、第三段階の輝かしい歴史伝承として結晶している。

崇神紀の出雲建征討譚の組み換え その手法は、崇神紀に伝える第二段階の服属伝承を巧みに組み替えることであった。崇神紀の出雲氏の内訌の図式を大和朝廷側が活用・応用するとすれば、例えば四道將軍の二名(吉備津彦と武渟河別)のうちの一名を選択し、出雲建＝振根を止屋の淵で騙し討ちにし、〈出雲建の大刀の歌〉をうたって嘲笑してもよかった。しかしこれでは、四道將軍がここで「出雲建」に匹敵する「倭建」＝大和朝廷の英雄を名乗ることになり、それは廷臣・臣下の立場上できないことであった。

そこで、大和朝廷の英雄＝「倭建」を登場させて、既に出雲の国に存在していた「出雲建」とダイナミックに対峙させ、崇神紀の振根＝「出雲建」対飯入根の構図を「出雲建」対「倭建」の構図に仕立て直した、と考えられる。

ロイヤルヤクザ そして、倭建は熊曾建征討においてロイヤルヤクザぶりを十二分に発揮し、王権の絶対性を打ち出していたので、これに続く出雲建征討でもその構想を反復させようとした。

そして〈出雲建の大刀の歌〉に限っていうと、崇神紀と同様に「鏑無し」が「さ身無し」になっているけれども、出雲建の見掛け倒しぶりが倭建によって強調され、結句の「あはれ」は中身の刀身がなくて「ああおかし」という出雲建への罵倒・嘲笑に変質させ、いかにも倭建らしいヤクザ調になっている。

こうして崇神紀の出雲建征討譚は巧みに置き換えられて、倭建物語の一つのピースとして景行記の西征譚にはめ込まれ、朝廷の歴史伝承として定着した。

出雲建への皮肉な讃美 この点、「出雲の掌握と刀剣讃美——「さみなし」歌の解釈から——」(小野諒巳)は、「び」と「み」の音相通を説く言別説を継承し、出雲建征討譚の〈出雲建の大刀の歌〉の「さみなし」を「鏑無し」と解し、出雲建の手中にある木刀＝「詐の刀」を皮肉交じりに讃美し

九 下降する〈出雲建の大刀の歌〉

1 服属伝承

支配被支配の論理 以上は、出雲の国の氏族内で完結していた祭祀伝承である。

しかし時代の進展につれて、大和朝廷から服属を迫られる事態は避けがたくなっていく。こうして有無を言わせない支配・被支配の論理が、第一段階の祭祀伝承に割り込み、その変質を余儀なくさせることになる。

では、その出雲における第二段階の服属のレベルは、どのように展開されたであろうか。そして、その第三段階としてそれらがどのように歴史伝承として定着しているであろうか。それらについては既にかなり前述しているので、ここではその要点だけを記すことにする。

飯入根の神宝の奉獻 出雲の朝廷への服属の具体は、崇神紀の出雲建征討譚に端的に記されている。すなわち、出雲氏の首長の振根の出張中に雲氏のナンバー2の弟・飯入根が、出雲の大神の神宝を見たいという皇命を受けてその神宝を早々に朝廷に献上してしまった。そのあり方は、国栖族が服属の印として神剣と御酒ならびに二首の呪祷歌を一組にして朝廷に奉獻したと同一線上にある。

出雲ではこれがきっかけで出雲氏の族内で内紛が生じ、首長の振根は飯入根を暗殺してしまう。そこで朝廷側は軍事的に介入し、振根を誅殺している。

朝廷側の妥協 その混乱によって出雲氏の祭祀は一時中断するものの、出雲大神の厳かな神託がくだり、その大神の祟りを恐れたらしい朝廷側は神宝を出雲氏に返却し、飯入根の子の鷯濡淳を出雲氏の首領^{くにのみやつこ}に就任させている。このような朝廷側の妥協もあり、出雲氏の立場はある程度回復しているものの、そのあり方は明らかに朝廷に服属を誓うことを前提にしていた。

出雲国造神賀詞 『出雲国造神賀詞』^{いづものくにのみやつこのかむよこと}は、出雲氏の神宝を当代の天皇に奉獻し、その神宝にまつわる祝言を天皇に申し上げる寿詞である。この出雲式の祭祀儀礼を天皇の前で行うことは、出雲氏が天皇に服属を誓う政治的な営みであった。

この神賀詞の史書への初出は元正天皇の霊龜二年(七十六年)で、崇神朝よりはるかに後の服属儀礼であるけれども、その朝廷に神宝を奉獻する形で服属する祖形・基本姿勢は、崇神紀において飯入根と鷯濡淳の親子によって構築されたものであった。

この崇神紀の出雲建征討譚は最も史実に近い伝承で、このような緊迫した支配・被支配の関係を全国的に数限りなく反復しながら、朝廷側の支配力は徐々に強化されたであろう。

2 物語歌謡としての〈出雲建の大刀の歌〉

崇神紀の出雲建征討譚 以上の支配・被支配の関係は、第二段階の服属伝承として崇神紀の出雲建征討譚として定着している。「三 崇神紀の出雲建征討譚」で前述したように『先代旧事本紀』^{せんだいくじほんぎ}をみると、飯入根の子の鷯濡淳が崇神朝に出雲の国の国造に任命されているので、飯入根暗殺に至った出雲氏族の内紛が崇神朝の史実だという歴史観が強かった、とわかる。このように崇神朝の出雲建征討譚は、服属伝承であると同時に、

劍・鏡などの十種の呪具をユラユラと振り動かすと霊力が発動し、痛いところは治り、死人も生き返るといふ。

この物部氏の呪法は、前述したようにたくさんのお宝によせて天皇の寿を奏上する『出雲国造神賀詞』にも認められるものである。

治平 また、治平の効用も考えられる。

十掬劍と国譲り その典型例として、次のような神劍による国譲り神話が神代記にある。建御雷の神が「出雲の国の伊那佐の小浜に降り到りて、十掬劍を抜きて、逆に浪の穂に刺し立て、其の劍の前に踏み坐して」、振られたらう劍の先に刀劍の神・雷神が出現している。そしてこの刀劍の神は、同じく神威を振るう「道速振る国つ神等」を「言向け和平し」て国譲りをさせている。

このように劍から神靈が出現し、その切っ先を「振る」と一層その威力が増幅されて負を正に転化している。

生大刀・生弓矢 またこれと同様のことが、神代記の大国主の神の伝承として「葦原の中国」でも起こっている。葦原の中国を統一した大国主は、神の国から「生大刀・生弓矢」を盗み出し、そして須世理毘売（須佐之男の娘で大国主の正妃）まで背負って逃げ出し、葦原の中国（現し国）に帰ってくる。この時、須佐之男は葦原の色許男（大國主）にむかった次のように彼の将来を予祝している。

其の汝が持てる生大刀、生弓矢を以ちて、汝が庶兄弟をば坂の御尾に追ひ伏せ、亦河の瀬に追ひ撥ひて、おれ大国主の神と為り、亦宇都志国玉の神と為り、其の我が女須世理毘売を適妻と為て、宇迦の山の山本に、底つ石根に宮柱ふとしり、高天の原に氷椽たかしりて居れ。是の奴よ。

そして、須佐之男の予祝のことばの前半部という武による統治は直ちに実践され、前述した予祝のことばの直後に次のように伝えられている。

故、其の大刀・弓を持ちて其の八十神を追ひ避りし時、坂の御尾毎に追ひ伏せ、河の瀬毎に追ひ撥ひて、国を作り始めたまひき。

かほどに、神の国からもたらされた由緒ある「生大刀、生弓矢」は、治平の呪能をもつものであった。

呪歌の構造から 以上、〈出雲建の大刀の歌〉の原形が呪歌の構造をもっているもので、その歌意は次のようになる。「弥（八）つ芽（藻）差す出づる藻（出雲建）」という由緒ある者が「佩ける大刀」は、「黒葛多巻き鍔無し」という由緒ある呪物なので、これを出雲建が腰に「佩け」ば、大地（森や田畑）が豊穰になり、病が治癒し、死人も蘇生し、治平も叶えられる、という効用がもたらされる。そして、それらの効用があまりに靈驗あらたかなので、それらのすべてを「あはれ」（ああ素晴らしいよ）という感嘆詞に込めた、と解しよう。

神賀詞の御横刀との合致 こうしてみると、出雲の国譲りで用いられた「十掬劍」や大物主が葦原の中国を統一した「生大刀（生弓矢）」は、『出雲国造神賀詞』の神宝のなかの⑧「御横刀」が国土を広々とち堅めて統治できると讃美されていることとは合致していることに気付かされる。

中川の里 (中略) 昔、近江の天皇のみ世、丸部の具というものありき。是は仲川の里人なり。此の人、河内の国免寸の村の人の齋たる剣を買ひ取りき。剣を得てより以後、家挙りて滅び亡せき。然して後、苦編部の犬猪、彼の地の墟を圍するに、土の中に此の剣を得たり。土と相去ること、廻り一尺ばかりなり。其の柄は朽ち失せけれど、其の刃は渋びず、光、明らけき鏡の如し。ここに、犬猪、即ち心に恠しと懷ひ、剣を取りて家に帰り、仍ち、鍛人を招びて、其の刃を焼かしめき。その時、此の剣、申屈して蛇の如し。鍛人大きに驚き、當らずして止みぬ。ここに、犬猪、異しき剣と以為ひて、朝廷に献りき。(後略)

このように、中川の里の条をみるならば、剣に錆がないということは、その「光、明らけき鏡の如し」と同義であり、またこの剣は火で焼くと蛇のように伸縮したともいうから、「錆無し」は名剣の証しになっている。鉄の最大の弱点は、空気に触れると酸化して錆が生じて劣化し、剣の場合はなまくらになってしまう。したがって、鉄を素材にする大刀に錆がないというのは稀なことなので、「錆無し」は霊剣になりえる最良の条件になるのではなからうか。

5 神剣の靈験

神剣の効用 (出雲建の大刀の歌) の原形の「あはれ」(ああ見事だ) を幸・豊穰・治平などへの讃嘆だと想定してみたけれども、その具体をもう少し探ってみた。

森の活性化 「七 国栖伝承の生成」で前述したように、国栖の神剣と(国栖の大刀の歌)は、冬枯れの檀の森に春を招いて若葉を茂らせ、主食の檀の実などの収穫を保証している。

神代紀上によると草薙の剣の別名は、「天の叢雲の剣」になっている。そしてその名の由来として、「蓋し大蛇居る上に、常に雲氣有り。故以て名くるか」と記している。この記述から類推すると、この剣は雨雲を招く神剣で、山林の乾燥・火災を防いで樹木の生育を促していたらう。

「天の叢雲の剣」が雲氣を呼ぶことは、次の神話からもわかる。神代記の伊邪那岐の命、火の神を斬るの条では、火の神を斬った伊邪那岐の「御刀の手上に集まれる血、手保より漏き出でて、成れる神の名は、閼添加美の神。次に閼御津羽の神」だった。『古事記』[西宮]によると、この閼添加美の神と閼御津羽の神は、「御剣の手上に柄に集まった血が、手の指の間から漏れ出て化成した水の神」を意味し、「神剣の靈氣が雲になって水を呼ぶことの表象だろう」と説く。

治癒・蘇生 また治癒や蘇生の効用も考えられる。例えば、物部氏が伝える十の宝(瀛都鏡・辺都鏡・八握の剣・生玉・死反の玉・足玉・道反の玉・蛇の比礼・蜂の比礼・品の物の比礼)を用いた呪法が『先代旧辞本紀』卷三にあり、次のように唱えている。

もし痛き処あらば、ここに十の宝をして一二三四五六七八九十と布留部。ゆらゆらと布留部。かくのごとくせば、死に人も生き反る。これすなはちいはゆる布留の言の本なり。

ふり別けて、三身の綱打ち掛けて、霜黒葛繰るや繰るやに、河船のもそろもそろに、国来国来と引き来縫へる国は、去豆の折絶より、八ほにきづきの御埼なり。(下略)

これは巨人神の八束水臣津野の命が出雲の国を創造したという神話の冒頭部で、この形式を四回反復して、海のかなたの朝鮮半島(新羅)や隠岐の島、能登半島などから陸地を切り取って三身の綱を打ちかけて「霜黒葛」を「繰るや繰るや」と力強く手繰り寄せて、国土を拡大させている。このように出雲人にとって「黒葛」は巨人神の八束水臣津野の命の国土創成に重大な働きをした強靱な蔓草であった。

播磨の御方の里の地名由来 また、右と類似する神話として葦原の志許乎の命(大物主の命の別名)と朝鮮半島(新羅)渡来の天の日槍の命が「黒葛」を投げながら国土を領有しあつた伝承が、次のように『播磨国風土記』宍粟郡御方の里の条にある。

御方の里(中略) 御形と号くる所以は、葦原志許乎の命、天の日槍の命と、黒土の志爾高に到りまし、各黒葛三条を以ちて、足に着けて投げたまひき。その時、葦原志許乎の命の黒葛は、一条は但馬の気多の郡に落ち、一条は但馬の夜夫の郡に落ち、一条は村に落ちき。故、三条といふ。天の日槍の命の黒葛は、皆、但馬の国に落ちき。故、但馬の伊都志の地を占めて在しき。一ひといへらく、大神、形見と為て、御杖を此の村に植てたまひき。故、御形といふ。

この地名の「御形」は黒葛の「三条」(三本の紐状のもの)の義で、この黒葛を用いて神々が国土の占有を競っている。そして、この偉大な国土創成の神々の黒葛を用いた神業に因んで、三条の里＝御方(御形)の里という、と誇らかに地名の由来を語っている。

してみると、右のような強力な国土創成神話をもつ出雲の国の首領が、偉大な巨人神が用いた国土創成ゆかりの「黒葛」を「出雲建」＝出雲の支配者として己の所持する神剣の鞘にたくさん巻きつけてその權威のほどを誇示することは、大いにありえることであろう。

4 錆のない神剣

錆無し 〈出雲建の大刀の歌〉の原形の五句の「錆無し」が、神剣を讃美する句である。

「出雲建が佩ける太刀」「福本雅二」は、「神聖な資性を内包する剣に、さび、なし」というような消極的表現によって、人はその讃嘆を示すであろうか。およそいつの時代、いづれの国にあつても、武器への賛辞は、そのきらめき輝けるさまを述べ、その堅牢かつ鋭利をいう」と説く。

播磨国風土記の中川の里の条 しかし、例えば次に引用する『播磨国風土記』讃谷郡中川の里の条は、錆のない剣の靈験を語っている。

で失うことは、出雲人にとってはその存立が疑われるほどの困惑をもたらしたのである。

右の神託には、「弥(八)つ芽(藻)差す」「出づる藻＝出雲」という、「出雲」に懸かる聖なる讃め詞・枕詞の語義・由来もよく示されていた。出雲国造神賀詞『出雲国造神賀詞』にも、この出雲氏の水の聖地の霊威のほどが、そこにある「若水沼間(若水の藻)」をとみの水(若返水の水)ならびにその水底に安置されている「まそひ(真澄)の大御鏡」によって述べられていた。

出雲国風土記の水の聖地『出雲国風土記』意宇郡忌部の神戸の条によると、出雲の国造が神賀詞を奏上する時、この忌部の神戸の「神の湯」(玉造温泉)で「御沐します」ことになっていた。

そしてこれと並んで、同風土記仁多郡三沢の郷の条によると、国造は同じく上京の折にここでも禊ぎをしている。そしてこの三沢にも、「水沼出でて」「水沼出而」いた。

この三沢には、次のような神話伝承がまつわりついている。阿遲須積高彦根の命は壮年になるまでことばを発しなかったけれども、この「水沼」(水の藻)の生える三沢で「沐浴し坐し」たところ、ことばを発したという。そこでこれに倣って、国造も上京の折に「其の水沼の出でて用ゐ初むるなり」(禊ぎに用いる水としている)、と記している。

この両地(忌部の神戸と三沢)にある聖なる水(湯)と「水沼」(水の藻)は、止屋の淵の「をとみの水(若返水の水)」と「若水沼間(若水の藻)」に相当する霊物であった。

弥(八)つ芽(藻)差す出づる藻＝出雲 こうしてみると、この水の聖地で出雲氏の新生・再生を図る祭祀が執り行われ、その祭祀の最高神人＝出雲氏の首長が、出雲氏の信仰の中核になる聖なる「弥(八)つ芽(藻)」が「差す」＝「出づる藻」＝「出雲」を導き出し、その「出雲」を冠する「出雲建」と称賛されるのは、きわめて自然なことであった。

そして、歴代一人いた「出雲建」＝出雲氏の首長は、就任時は素より「弥(八)つ芽(藻)」が「差す」時は、この玉藻の繁る聖地で生命更新の祭祀を執行して、名実ともに「弥(八)つ芽(藻)差す出づる藻＝出雲+建」として霊格を高め、この〈出雲建の大刀の歌〉の原形によってその麗姿が讃美され、その佩く大刀の効用が期待されたろう。

3 神剣の鞘の見事さ

黒葛多巻き〈出雲建の大刀の歌〉の原形の四句目の「黒葛多巻き」は、神剣の鞘の見事さを表している。

出雲の国引き神話 この「黒葛」は、「霜黒葛」(霜をうけて一層強靱になったカズラ・蔓草)の形で、『出雲国風土記』意宇郡の条の出雲の国引き神話に、次のように登場している。

国引きましし八束水臣津野の命、「八雲立つ出雲の国は、狭布の稚国なるかも。初国小く作らせり。故、作り縫はな」と詔りたまひて、「栲

の独立歌謡で、出雲氏の首長が出雲氏の聖地で執行した祭祀儀礼の場でうたわれたことを述べたい。

服属伝承と歴史伝承 しかし、出雲氏が大和朝廷に服属する第二段階になり、それが服属伝承として定着するようになる。

そして、それがさらに歴史化されて史書の『古事記』に記載される第三段階に入って、歴史伝承として定着してくる。

この段階になると、『出雲建の大刀の歌』の原形の詞章の一部が、地の文に合わせて「鏑」が「さ身」に改変されて物語歌に変容している。素よりその改変は、支配者側の朝廷の意向に添ったものである。すなわち、崇神紀の〈出雲建の大刀の歌〉(紀20)では、出雲建〓出雲の首長の振根の愚劣さを「時の人」に批判させ、出雲氏の内紛を裁く朝廷の優位性を強調している。

そして、景行記の〈出雲建の大刀の歌〉(記23)に至っては、倭建が出雲建を罵倒・嘲笑して大和朝廷の絶対的な優位を語っているようである。以上のことを本節と次の「九 下降する〈出雲建の大刀の歌〉」で述べてみたい。

2 出雲氏の祭場

止屋の淵 景行記も崇神紀も、その地の文はかなり物語化されているように見えるけれども、独立した呪禱の儀礼歌の〈出雲建の大刀の歌〉の原形を生み出した現場をよく反映しているようである。

崇神紀では、出雲氏の首長の振根は、次のことを述べて弟の飯入根を祭場に導いている。

頃者、止屋の淵に多に妻生ひたり。願はくは共に行きて見欲し。(中略) 淵の水清冷し。願はくは共に游泳みせむと欲ふ。

景行記も右と同じ場面を設定し、倭建と出雲建は次の動きをしている。

結友したまひき。(中略) 共に肥河に泳したまひき。

和平に至るまでは、大和朝廷と出雲王権の間には疑惑や暗闘があつたろうから、それらを「水に流す」ために出雲氏の聖地である止屋の淵で「游泳み」(覗き)をしたのであろう。

〈玉菱の鎮石出雲人の神託〉 前述したように崇神紀で入根がこの「止屋の淵」で暗殺された後、暗殺者の振根が誅殺され、それで出雲氏の祭祀が中絶したために、その異常さに基づく出雲の動揺が、小児の口から〈玉菱の鎮石出雲人の神託〉として発せられた。その主文の「玉菱の鎮石。出雲人の祭る、真種の甘美鏡」は、「止屋の淵」にある聖なる「玉菱」が生える川底の霊石〓「鎮石」に藻が「出づる」ところの「出づ藻」〓「出雲人」〓出雲氏が祭り上げる神鏡があり、それは「真種の甘美鏡」だ、と顕揚するものであった。出雲氏の神宝の中核は、この聖なる藻の生える水中の「鎮石」に安置された神鏡だった。この神鏡を中核にした出雲氏の神宝が朝廷に奉獻させられたのみならず、それらを祀る最高神人ま

は、国内統治は「山海の政」^{やまうみまつりこと}。山人や海人の支配と「食国の政」^{をすくにまつりこと}。農耕民の支配に二分してその実務を大山守の命と大雀の命が担当し、その奏上を天皇が「聞こしめす」^{きこしめす}。お治めになることであり、次期天皇には宇遲能和紀郎子が即位することだった。

「食国の政」と「海山の政」の独占 このうち「食国の政」の実態が髪長媛傳承で示され、そこでは大雀の命が皇位に踏み込む形で応神天皇の職務を代行している。

そして「山海の政」の実態が国栖傳承で示され、そこでも大雀の命が〈国栖の大刀の歌〉で河内王朝の天皇の称号を用いて「品陀の日の御子大雀」^{おほささき せんしやう}を僭称し、国栖たちに御酒を献上させている。このように大雀の命は「山海の政」の実務担当者の大山守の命を差し置いて天皇を僭称し、皇位にむけて大きく前進している。

すなわち国栖傳承は、単に国栖族の服属を語るのみならず、山人や海人の服属をも代表して語り、同時に皇位繼承争いをも語っている。

国栖傳承Ⅱ仁徳前記の一翼 結局、治世の後半期の応神天皇は、朝鮮半島経営だけを専権事項にし、天皇の崩御後は大雀の命が皇位繼承争いに勝利して仁徳天皇として即位している。

以上、応神記の構造は有機的立体的で仁徳前記の様相を呈し、国栖傳承はその重要な一翼を担っている。

なお、右の国栖傳承の考察として『山人・海人傳承と河内王朝』『畠山』が詳論しているので、参照願いたい。

八 〈出雲建の大刀の歌〉の原形

1 本節のねらい

本節のねらい 前節で述べたように〈国栖の大刀の歌〉(記47)を含む国栖傳承の生成が三段階(祭祀傳承・服属傳承・歴史傳承)になっていることは、〈出雲建の大刀の歌〉(記23・紀20)を中核にする出雲建征討譚の生成がやはり三段階(祭祀傳承・服属傳承・歴史傳承)になっているらしいことを想定させる。

祭祀傳承 「一 はじめに」で前述したように、まず第一段階の祭祀傳承のレベルでは、〈出雲建の大刀の歌〉の原形が靈剣を讃美する次の形である、と想定する。

弥(八)つ芽(藻)差す 出雲建が 佩ける大刀、
 黒葛多卷き 錆無しにあはれ。

〈出雲建の大刀の歌〉の原形・元歌が靈剣讃美の独立歌謡であることは、「出雲建が佩ける刀」「守屋俊彦」と「出雲建が佩ける大刀」小論」「野津将史」が、先行研究の『稜威言別』『橘守部』や『記紀歌謡全註解』『相磯貞三』を承けて鋭意追求している。ここではこれらの先行研究を踏まえ、祭と政を抑える出雲の臣の首長が「出雲建」と讃美され、その腰に佩びる神剣によって出雲の国に豊穰や治平などをもたらすことを予祝した呪

の歌〉の原形をうたったろう。その〈国栖の大刀の歌〉の原形には、「品陀の日の御子大雀」の箇所は族長の神名「石押分之子」が入っている。

檀の森の新生 この歌は祭場における大刀の働きを述べる呪詛歌で、一族の最高神人の石押分之子によって振られた大刀の末から呪力が発動し、冬枯れの檀の木の下から次代を担う春の若木が繁茂して、自ら「さやさや」と双葉の葉擦れの音を発している、と述べている。

直会の酒宴 こうして新生した檀の森で御酒が醸され、檀の木の下で神宴・直会が催され、まず族長「まろが親」に御酒を勧めてその健康を祝する〈国栖の勧酒歌〉が国栖族の最高神女によってうたわれる。そしてこれを皮切りに、次々と一族の全員がこの御酒を勧められ、一年間の健康が祈願される。

以上のように国栖歌二首は、檀の森に一陽来復をもたらす正儀において〈国栖の大刀の歌〉の原形がうたわれ、次いで直会に入つて〈国栖の勧酒歌〉がうたわれる組歌の関係にある。

5 服属伝承

国栖の服属と山人の統治 第二段階の国栖の服属と山人の統治は、およそ以下のとおりである。河内王朝が海上交通の整備のために山人と海人を統括する「山海の政」を設け、その一環として山人の国栖族を服属させている。このとき国栖族は、服属した印として神剣と御酒ならびに二首の呪詛歌を一組にして宮廷に奉献した。

天皇による森の新生 すると祭祀権を移譲された天皇は、山人の繁栄を祈願して神剣を腰に吊り佩いて大刀の末を振り、国栖人に〈国栖の大刀の歌〉をうたわせて森の新生を図った。この時の〈国栖の大刀の歌〉は、「品陀の日の御子大雀」の箇所に、河内王朝の天皇名が「品陀の日の御子○○(天皇名)」のように、例えば履中天皇の場合は「品陀の日の御子伊耶本和氣」のように入っていたらう。

天皇への服属 次いで、国栖族の最高神女が〈国栖の勧酒歌〉をうたいながら御酒を勧め、天皇に服属を誓っている。祭祀における勧酒は、これに支配・被支配の論理が絡むと、勧酒する側は御酒を飲む者に服属することの意思表示に変容してくる。この国栖の勧酒の場では、その勧酒歌の「まろが親」は、支配者である当代の天皇を指すことになる。

新層の国栖伝承 しかし、河内王朝以後はいつしか「山海の政」が解体され、宮廷儀礼が農耕中心の「食国の政」に一本化されると、山人の呪儀が衰弱して森を活性化させる〈国栖の大刀の歌〉が欠落し、〈国栖の勧酒歌〉を国栖の最高神女にうたわせながら御酒を勧めることだけで服属を誓わせるようになった。〈国栖の勧酒歌〉(紀39)しか伝えない応神紀の国栖伝承は、その新層のあり方を反映している。

6 歴史伝承

応神朝への歴史伝承化 第三段階の国栖伝承の応神記への歴史伝承化は、およそ次のとおりである。

応神記の国栖伝承には〈国栖の大刀の歌〉と〈国栖の勧酒歌〉があって、その主役が大雀の命である。そもそも応神記における応神天皇の構想

2 応神記の国栖伝承の本文

本文 応神記の国栖(主)伝承の本文は、次のとおりである。

《国栖の大刀の歌》 又吉野の国主等、大雀の命の佩かせる御刀を瞻て歌ひて曰はく、

品陀の 日の御子 大雀 佩かせる大刀。 品陀の 日の御子 大雀が 帯びておいでの大刀。

本吊るき 末振ゆ。 その大刀の本を吊り佩き、その先が振れる。

冬木の 素幹が 下木の、さやさや。 その冬木の 裸の幹の下木が、若々しい枝葉を茂らせて自ずからさやさと鳴り響かすよ。 (記47)

《国栖の勸酒歌》 又吉野の白禰上に横白を作りて、其の横白に大御酒を醸みて、其の大御酒を献りし時に、口鼓を撃ち伎を為して歌ひて曰はく、

白禰の生に 横白を作り、横白に 醸みし大御酒。 榎の林で 横白を作り、その横白で 醸した大御酒です。

甘らに 聞こしもち飲せ。 まろが親。 美味しく 召し上がってください。 我が親父さま。 (記48)

国栖奏の演出の説明 此の歌は、国主等大贅を献る時々、恒に今に至るまで詠ふ歌なり。

3 国栖伝承の生成の三段階

生成の三段階 この応神記の国栖(主)伝承が生成する過程には、およそ次のように祭祀伝承・服属伝承・歴史伝承の三段階がある。

祭祀儀礼 まず、第一段階の国栖伝承の原形は、吉野の山人の国栖一族が食料などの生産の場である森に春を招く冬至祭でうたわれた独立歌謡で、祭祀伝承というべきものだった。

服属伝承 次に、その国栖が大和朝廷に服属を誓う段階に入り、国栖の特産物とともにこの祭祀伝承が朝廷に奉献されることになる。そして、それが後に山人を統治する国栖奏として宮廷儀礼化されている。この第二段階は、服属伝承というべきレベルにある。

歴史伝承 そして、第三段階の国栖伝承の応神記への定着は、国栖の服属したのが応神朝のこととされ、また大雀が次期皇位を狙って権力を集中化し、遂に仁徳天皇として即位するという歴史伝承の一環として語られている。

4 祭祀伝承

祭祀伝承の復原 第一段階の祭祀伝承としてのあり方は、およそ以下のとおりであろう。山人の国栖族の生業の基盤である照葉樹の榎の森が冬に衰弱すると、榎の森の新生・再生を図って、春を招く祭りが太陽の運行に基づく年の切り替わる冬至の頃に行われた。

石押分之子 その祭場で神名を「石押分之子」(神武記東征の条に登場)という国栖の族長Ⅱ最高の司祭者が、国栖族伝来の神剣・大刀を腰に吊り佩いてその末を「振ゆ」(神剣の靈威を発動させる)神遊びをすると、国栖族一同が「石押分之子」・族長の大刀を見つめながら、呪詛歌の《国栖の大刀

御酒の呪力の発動 次いでその御酒の呪力が発動されると、その結果として御酒の効用＝長命・喜びなどがもたらされることも構造化される。こうして、いわゆる呪物歌・神歌に籠もる言霊が働く。

4 〈舒明天皇の国見歌〉

〈舒明天皇の国見歌〉（舒明天皇の国見歌）（万—2）は、群れ成す山のなかの山である由緒ある「天の香具山」（由緒ある所に、唯一の支配者・天皇が「登り立ち国見をすれば」（由緒ある者の所作）、国原には民の飯を炊くかまどの煙りが立ち、海原は鴉がのどかに飛んで、大和の国＝大和朝廷の支配する国々が繁栄する（効用）、と呪縛している。聖なる「天の香具山」に由緒ある天皇が登って執り行う初春の国見儀礼は、恐らくこの呪物歌をうたい囃す何らかの神遊び（彈琴を伴っていたか）によってその効果がより促進されているだろう。

負から正への転化 以上、望ましくない厳しい現象・状況＝不健康・国土の不毛（不作）・海上の荒れ（不漁）などが立ちはだかる時、これを取り除いて望ましい方向＝健康・国土の豊かさ（豊作）・海上の風（豊漁）などに転換しようとして、祭祀儀礼・神遊びが行われ、呪物歌がうたわれる。すなわち呪物歌は、呪術的行為を伴いながら祭祀儀礼の場でうたわれてはじめて言霊の力を發揮し、理想的な世界が将来するように仕組まれている。呪物・呪具を用いる場合、その呪物・呪具の由緒正しさを示し、その威力が発動すると、その呪的效果が發揮する、と述べている。

七 国栖伝承の生成

1 本節のねらい

本節のねらい 前節で呪物歌の基本構造をおよそ確認した。そこで、次いで神剣を用いた呪物歌の典型例として〈国栖の大刀の歌〉（記47）を取り上げ、その構造は素より、その生成、変遷のあり様を見渡してみたい。

独立歌謡から物語歌謡へ 〈国栖の大刀の歌〉（記47）のあり方は、本来、森に春を招く祭祀の場でうたわれた独立した呪物歌であったのが、応神記の物語歌謡として転用されたものである。

そしてそのあり方は、前述したように〈出雲建の大刀の歌〉（記23・紀20）が本来、出雲の族長がその職に就任する祭祀でその英姿を讃美してその繁栄を寿ぐ独立した呪物歌であったものが、崇神紀や景行記の出雲建征討譚の物語歌謡として転用された過程と酷似している。

そこで、〈国栖の大刀の歌〉を含む応神記の国栖伝承をいささか丁寧に考察してみる。

そしてその上で、〈国栖の大刀の歌〉（記47）のあり方と似た軌跡を辿っているらしい〈出雲建の大刀の歌〉のあり方を、次の「八〈出雲建の大刀の歌〉の原形」と「九 下降する〈出雲建の大刀の歌〉」で探ってみよう。

《呪袴歌の構造》

歌 謡 名	由緒あるもの（者・物）・所・所作	発 動	効 用
活目の勸酒歌 （紀15）	この御酒は 我が御酒ならず。 大和成す 大物主の 醸みし御酒。	（なし。「飲せば」が想定で きる）	幾久。幾久。
国栖の勸酒歌 （記48）	白禰の生に 横白を作り、 横白に 醸みし大御酒。	甘らに 聞こしもち飲せ。	（なし。「幾久」や、「あやに甚樂し」 などが想定される）
酒楽の歌（謝酒歌） （記40）	この御酒を 醸みけむ人は、 その鼓 白に立てて、 歌ひつつ 醸みけれかも、 舞ひつつ 醸みけれかも、	（なし。「飲せば」が想定で きる）	この御酒の 御酒の あやに甚樂し。 ささ。
舒明天皇の国見歌 （万―2）	大和には 群山あれど、 とりよるふ 天の香具山。	登り立ち 国見をすれば、	国原は煙立ち立つ。 海原は 鷗立ち立つ。 うまし国ぞ。あきづ島 大和の国は。
国栖の大刀の歌 （記47）	品陀の 日の御子 大雀 佩かせる大刀。	本吊るき 末振ゆ。	冬木の 素幹が 下木の、 さやさや。
出雲建の大刀の歌 （記23・紀20）の 原形	弥（八つ）芽（藻） 差す 出雲建が 佩ける大刀、黒葛多巻き、錆無しに、	佩ける	あはれ。

3 御酒の生産叙事と呪力の発動

勸酒歌と謝酒歌

はじめの三首は御酒の歌である。由緒ある者が由緒ある道具Ⅱ呪物を用いて由緒ある所作をして作った御酒を提示し、これを飲むと、瑞々しい永久の命が保証されて楽しくなる、と述べている。主人あるいは下位者が客人あるいは上位者に御酒を勧める時、そして客人・上位者がその御酒に感謝する時、これらの呪袴の勸酒歌と謝酒歌を囃しながらうたうことによって、霊酒と言霊が機能して呪的な効力を発揮する。

御酒の生産叙事

この御酒の歌のうち、「由緒あるもの・所・所作」の部分は、いわゆる御酒の生産叙事である。由緒ある者が由緒ある所で由緒ある道具Ⅱ呪具を用いて由緒ある所作をして醸した御酒を提示しているのは、御酒がいかに優れた靈力をもっているかを述べるためである。

してしかるべきだった。

しかし、その実態はこの⑧の後に最後の神宝の⑨「まそひ（真澄）の大御鏡」が位置しているのは、なぜだろうか。それは、〈玉菱の鎮石出雲人の神託〉に解答の鍵があるだろう。この託宣は、神賀詞の⑧と⑨、すなわち「若水沼間〓若水の藻」と「若返水の水」に取り囲まれた水底の「鎮石」に安置された「真種の甘美鏡」〓「まそひ（真澄）の大御鏡」を強調している。してみると、⑧「若水沼間〓若水の藻」と「若返水の水」はそれだけでも稜威ある霊物であつたけれども、同時に「真種の甘美鏡」〓⑨「まそひ（真澄）の大御鏡」を取り囲んで常に共存している霊物であることを示しているよう。

以上から、聖なる水底に安置される神宝とは、⑨「まそひ（真澄）の大御鏡」〓神鏡だけだった、とわかるだろう。

六 呪祷歌の基本構造

1 本節のねらい

本節のねらい 〈出雲建の大刀の歌〉（記23・紀20）の本来のあり方は、基本的に「出雲の臣の歴代の首長が、一族の聖水の流れる祭場で就任した際に、その英姿を「出雲建」と讃美し、その所有する大刀によって出雲の繁栄を予祝した儀礼歌であつた、と考えている。あるいはまた、祭場でなんらかの瑞祥が見られた際にも、その祭場で族長の威力の更新・若返りを図り、族長の英姿を改めて「出雲建」と讃美し、その腰に佩びる大刀の威力によって出雲の繁栄を改めて祝福した、とも考えられる。

しかしそのことを確定するには、まず呪祷歌の基本的な構造を見極めなければならない。そこで本節は、この呪祷歌の基本構造を確認しておく。

2 呪祷歌の基本構造

呪祷歌の基本構造 呪祷歌とは、それをうたうことによって所期の目的を呪術的に達成しようとする韻文である。呪祷歌は目的を達成することをねらう歌であるから、その呪的効果を高めるために表現に工夫が凝らされる。すなわち言霊が効果的に発動するように、晴のことはが構造化される。そして同時に、由緒ある物〓呪具・呪物を用い、由緒ある所作で呪的な所作〓神遊びをすることで、そのねらいを全うしようとする。それで呪祷歌にはその呪的な行為が、しばしば色濃く反映する。こうして呪祷歌には、自ずからある程度共通した構造が形成されてくる。

その呪祷歌の基本構造は、由緒あるもの・所・所作を強調し、その呪的機能が発動すると、所期の効用が達成される、と述べるところにある。

呪祷歌の典型例 次にその呪祷歌の代表的な例を、《呪祷歌の構造》として挙げる。

4 聖なる水底の神鏡

『若水沼間』の語義 『延喜式』で神宝扱いされていない「若水沼間」と「をとみの水」とは、一体何だろうか。次に、「若水沼間」と「をとみの水」の語義とその実体を考えてみたい。

『古事記・祝詞』〔倉野・武田〕の頭注は「若水沼間」を「新しい水たまり」と解しているけれども、それでいいだろうか。この点、『日本古語辞典』〔松岡〕「ワカミヌマ(若水沼間)」の項は、「ミヌマはミル(葦)モ(藻)の音便であらう。(中略)ミラ(葦のやうな藻)」と解しており、かなり核心に迫っている。

しかしここは、あつさりとして「若水の藻」の訛りと解すべきかもしれない。

古川岸Ⅱ振る川岸 この「若水沼間」Ⅱ「若水の藻」に懸かる「彼方の古川岸、此方の古川岸に、生ひ立つ」は、この瑞々しい呪草の繁茂する聖地を示している。そしてこの川にある「川岸」に懸かる「古」は、「新たし」の対語の「古」の「古」ではなく、前述してある「振る」であろう。すなわち、『岩波古語辞典』「大野ほか」「ふり(震り・振り)」の項にあるように、「物が生命力を発揮して、生き生きと小さきみに動く意」であり、「神霊・生命の活力をよびます」ことである。

このように霊威溢れる「古Ⅱ振る川」の両岸の水草・「若水の藻」Ⅱ「若水沼間」を介して天皇を「弥若えに御若え」させるのではなくだろうか。古日と振根 万葉歌の〈古日を恋ふる歌〉(五—904・山上の憶良)の「古日」は憶良の一人息子の名前で、その名義は「霊」を澆刺と發揮するⅡ「振る」ことを祝したもので、生命力溢れる子という名義であった。そのようにあつてほしいという意気盛んな名前をもつ一人息子が夭折しているので、父の憶良の悲嘆のほどがよくわかる。

この伝でいくと前述したように、弟の飯入根を暗殺した「振根」も彼の生命力・活力の横溢さを祝した名義だったろう。すなわち出雲建の「振根」は、出雲の水の聖地の「彼方の古川岸、此方の古川岸に、生ひ立つ」の「古」Ⅱ「振る」(靈魂をよびます)に因んだ名前だ、と考えられる。

「をとみの水」の語義 次の「をとみの水」は、『岩波古語辞典』「大野ほか」「をとみ(若返水)」の項によると、この神賀詞を引用して「ヲトはヲトコ(壮士)・ヲトメ(少女)のヲトと同根で、若い意。また、若返りの意。ミは水の意。若返り水」と解説している。

とすると、この「若返水の水」にしても、同じ神威を發揮する義の「振る」を用いながら「彼方」「此方」の「古Ⅱ振る川岸に」「濯き振る」を冠している、不浄な穢れ・汚れ・病・老いなどを洗い流す「若返水の水」を介して天皇を「弥若返に御若返ま」すことになる。

呪詞による天皇の若返り 以上のように若返りの効用をもたらす「若水沼間Ⅱ若水の藻」と「若返水の水」は、神宝に等しい霊能をもっている。

しかしこれらは保存のきかない水草や水なので、出雲から朝廷まで持ち運べる呪物として扱えなかったであろう。そこで、出雲氏の祭場で用いる「若水沼間Ⅱ若水の藻」と「若返水の水」という呪詞だけを天皇に奉獻し、その奏上時にその言霊を發揮させて天皇の若返りを図ったのであろう。

川底の神鏡 以上、献上される数々の神宝(①～⑦・⑨)によって天皇に寿を奏上しているなかで、献上品になっていない⑧「若水沼間Ⅱ若水の藻」と「若返水の水」は、ことばだけで天皇に寿を奏上している、この⑧「若水沼間Ⅱ若水の藻」と「若返水の水」は、神賀詞の最後に位置

④御横刀広らにうち堅め、

⑤白御馬の、前足の爪・後足の爪、踏み立つる事は、大宮の内外の御門の柱を、上つ石ねに踏み堅め、下つ石根に踏み凝らし、

「振り立つる耳のいや高に、天の下知ろしめさむ事の志のため、

⑥白鶴の生御調の玩物と、

⑦倭文の太御心も確に、

⑧彼方の古川岸、此方の古川岸に、「生ひ立つ若水沼間の、弥若えに御若えまし、

「灌ぎ振るをとみの水の、弥若返に御若返まし、

⑨まそひの大御鏡の面をおしはるかして見そなはす事の如く、明つ御神の大八島国を、天地月日と共に、安らけく平らけく知ろしめさむ事の志のためと、

御禱の神宝を撃げ持ちて、神の礼じろ・臣の礼じろと、恐み恐みも、天つ次の神賀の吉詞白したまはく」と奏す。

延喜式の神宝 『延喜式』「九二七」「卷三臨時祭式」を見ると、神賀詞を奏上する時の神宝御贄の献物は、次のように規定されている。なお、以下の引用文の冒頭に付した①～⑨も、論者（畠山）が理解の便宜上、神賀詞と対応させて付したものである。

玉六十八枚（②赤水精八枚、①白水精十六枚、③青石四十四枚）、④金銀装横刀一口、⑨鏡一面、⑦倭文二端、⑤白眼鵠毛馬一匹、⑥白鶴二翼、御贄五十昇。

こうしてみると、神賀詞の⑧「若水沼間」と「をとみの水」を除いて、神賀詞の①～⑨の神宝は『延喜式』の神宝と一致している。

主文の大意 以上の神宝は、次のように天皇の繁栄を祝福している。すなわち、①白玉は長寿、②赤玉は健康、③青玉は整然とした統治、④御横刀は広々とうち堅めた統治、⑤白御馬の爪は大宮の柱の堅固、その耳は広大な統治、⑥白鶴は愛玩物、⑦倭文は御心の確かさ、⑧若水沼間をととのみは若返り、⑨まそひ（真澄）の大御鏡は国の永久の平穏な統治を、それぞれに祝福している。

御横刀 これらの神宝のうち、④御横刀は、「出雲建が佩ける刀」「守屋」が説くように「それ（論者注…④御横刀）を国造が持参しているところからすれば、恐らくこれが出雲の王の象徴としての呪刀であったとみるべきであろう。あの二三の歌（論者注…出雲建の大刀の歌）の「出雲建が佩ける刀」である」というのは、当たっているよう。

御横刀の取り上げ この④御横刀の呪力（統治力）は、出雲建が腰に佩く大刀に限らず、全国に割拠する建たちの所持する御横刀に共通した呪力であった。それ故に「三 ロイヤルヤクザ」で前述したように、より上位の建はこの④御横刀の呪力（統治力）を取り上げようと腐心していた。景行記において倭建が出雲建の佩びる大刀を一方的に取り上げて出雲を制圧したのは、その典型的な事例であった。

この指摘は炯眼である、と考える。ただし、氏は首長になる候補者が「聖なる川に呪刀を探し求め、それを手にし得た者が王になる」とまで説くけれども、次の「3 出雲国造神賀詞の神宝」で後述するように、止屋の淵の川底に安置されている神宝は神鏡だけのようである。

3 『出雲国造神賀詞』の神宝

出雲国造神賀詞 前述したように飯入根の子の「鷗濡淳」が出雲の国造の再興の祖になり、その国造家はその後も連綿と継承されている。そして、新任の国造は代々朝廷に出仕し、神宝を奉獻しながら出雲の神々の言葉として天皇に対する祝福のことは（寿詞を奏上することになっている。その寿詞が、『出雲国造神賀詞』である。

この神賀詞が史書に表れたはじめは『続日本紀』の元正天皇の霊龜二年（七一六）二月で、出雲の臣果安が奏上しており、その最後は仁明天皇の天長十年（八三三）四月で、出雲の臣豊持が奏上している。

大和朝廷に献上した神宝の中心が玉藻の生える止屋の淵の霊石に置かれている鏡らしいことは、小児の口走った〈玉妻の鎮石出雲人の神託〉から推測できた。そしてその他の神宝も、この神賀詞にその全貌を見せているようである。

神賀詞の前文 神賀詞の前文は、次のような三段構成を取っている。

(1) まず、出雲の熊野神社の大神の櫛御氣野の命と大穴持の命（大國主の命の別名）の二神をはじめとした一八六社の神々からの「神賀の吉詞」（寿詞）を奏上する、と表明する。

(2) 次に、高御魂の命が出雲の臣らの祖神の天の穂比の命（天照大御神の第二子）と天の夷鳥の命を天降して出雲の神を鎮めて平定した、と述べる。すなわち、神代記・紀に登場する天の菩比の神は、大國主の神・大己貴の神に「媚び附きて三年に至るまで復奏」さなかった不実な神にされているのに対して、この出雲氏が朝廷に奏上する神賀詞では「荒ぶる神等を撥ひ平け、国作らしし大神をも媚び静め」た立派な神だ、と称揚している。

(3) 次に、出雲の神々（大穴持の命、阿遲須伎高彦根の命、事代主の命、賀夜奈流美の命）の神霊を大和の神々に託して皇孫の守り神にし、天皇の繁栄のために神宝を奉獻する、と述べる。

神賀詞の主文の本文 そして(4)最後に、主文の賀詞が述べられ、出雲の神と出雲の臣（国造）から、八種類の神宝が献上され、その神宝に言寄せて天皇を祝福している。その(4)主文の本文は、次のとおりである。なお以下の引用文の冒頭に付した①～⑨は、論者（畠山）が理解の便宜上付したものである。また⑤と⑧の分かち書きは、文脈における懸かりと受けを示している。

- ① 白玉の大御白髪まし、
あかだまのおほみしろが
 - ② 赤玉の御赤らびまし、
あかだまのみあか
 - ③ 青玉の水の江の玉の行相に、
あをたまみづえのたまゆきあひ
- 明つ御神と大八島国知ろしめす、
あきみかみおほやしにし
すめらみことてながのおほみよ
天皇命の手長の大御世を、

「出雲人」(出雲氏の最高神人)が「祭る」「真種の甘美鏡」(真正な見事な神鏡)がある。

そして後段は、その水底にある神鏡の神秘のほどをひたすら強調している。

こうしてみるとこの神託は、神宝の中心にあるのが出雲氏の祭場の「止屋の淵」の玉藻の繁茂する水中の霊石に安置されてある神鏡である、と
いつているだろう。

この点「出雲神話異伝考」「三品彰英」も、次のように指摘している。

「たまもの鎮石」は海底の神石を意味したものらしく、「底宝御宝主」「水泳る御魂」などもそれに関連する言葉で、そうした水界(トコヨ)の御魂の鎮石を押し羽振って、出雲びとが大神を祭ることを語っているのである。

したがって、この神託を下す出雲の大神は、水中に安置されてあった御神体の神鏡を最大級に讃美することによって、それを失ったことへの無念・怒りを暗に表明している、とも解釈できる。そしてそれは同時に、神宝を取り上げた朝廷への崇りを引き起こす予兆だ、とも解釈できるものだったろう。

「弥(八)つ芽(藻)差す出雲」への連接 こうしてみると、この止屋の淵の「弥(八)つ芽(藻)差す」が「鎮石」を挟んでこれに続く「出雲」に懸かるのは、たくさん聖なる生える藻＝「出づる藻」が枕詞として「出雲」を導き出すことと同じことだ、とわかる。

出雲建の讃美 そして、出雲氏の最高神人が止屋の淵の聖なる「弥(八)つ芽(藻)差す」＝「出づる藻」を祭り、その祭祀権によってその最高神人が一族の首長・国造を兼務しているのが、「弥(八)つ芽(藻)差す」＝「出づる藻」＝「出雲」の国の勇者は、「弥(八)つ芽(藻)差す出雲建」だと讃嘆されてもおかしくない。

出雲建の誕生・更新 これをさらにもう一步推し進めて言い換えれば、「弥つ芽(藻)差す出雲建」は、この玉藻の繁茂する止屋の淵の祭祀の場で、王としての通過儀礼を受けて即位・誕生し、あるいはその王としての神威を機会あることに更新している、といえよう。

このように止屋の淵の繁茂する玉藻は出雲氏にとっては生命線だったので、最高神人＝首長・国造の振根が、この「止屋の淵に多に妾生ひたり」という瑞祥をみせた祭場で、「出雲建」の威力を更新する儀礼を執り行ったのであろう。とすれば、ナンバー2の弟の飯入根が首長の振根からこの儀礼に参列することを求められれば、これに同行することを断れるはずがないのである。

この点「出雲建が佩ける刀」「守屋俊彦」は、次のように述べる。

出雲の王達は、止屋淵において通過儀礼を受け、そこに隠されている、王の象徴としての呪刀を探し求め、王になって行った。(中略) こうして誕生した新しい王を賞賛したのが、この二三(論者注…出雲建の大刀の歌)の原歌なのであろう。

故、出雲の臣等、是の事に畏りて、大神を祭らずして間有り。時に丹波の氷上の人、名は氷香戸辺、皇太子活目の尊に啓して曰さく、「己が子、小兒有り。而して自然に言さく、

玉菱の鎮石。出雲人の祭る、真種の甘美鏡。

押し羽振る。甘美御神、底宝、御宝主。

山河の水泳る御魂。静挂かる甘美御神、底宝、御宝主。

(菱、此をば毛と云ふ。)

是は小兒の言に似らず。若しくは託きて言ふもの有らむ」とまうす。是に、皇太子、天皇に奏したまふ。則ち、勅して祭らしめたまふ。

祭祀中絶の動揺

大和朝廷の要請どおりに神宝を奉獻した弟の飯入根を首長の振根が騙し討ちにしたことを口実にして、朝廷は軍事介入をし、四道將軍の吉備津彦と武渟河別を遣わして、振根を誅殺してしまった。

そこで出雲の臣たちは出雲の大神の神宝を失ったのみならず、最高神人でもある首長まで失い、呆然自失としてしばらくは大神を祀るどころではなかったようである。

祭祀の復活

この時、一族の動揺・危機感が小兒の口から「玉菱の鎮石出雲人の神託」の形で現れた。これが丹波の氷上の人・氷香戸辺から皇太子(後の垂仁天皇)に奏上され、それがさらに父の崇神天皇に奏上され、事態の重大さに気付いたのか、勅が下って出雲氏の祭祀が復活している。

この祭祀の復活は、朝廷から神宝が返却されたことを意味していよう、といわれている。当然のことながら、神祭りは神霊が憑依する神宝の存在を前提にしているからである。権力者による神宝・祭祀権の強引な取り上げは、服属させられた氏族の恨みのみならず、その氏族の神の祟りを招きやすい。それでそれを和めるために、それなりの神宝・祭祀権を返して祭祀の執行を認める事例は、例えば崇神記・紀の大物主の神の祟りと大物主の子孫の大田田根子による祭祀の復活によく示されている。

2 神託の構造と主題

神託の構造 では、「玉菱の鎮石出雲人の神託」は何を言おうとしているのだろうか。この神託は古来難解とされている。出雲の神宝の所在をいうらしい点ではほぼ一致しているけれども、それが鏡か、玉かなど諸説がある。

「出雲建が佩ける太刀―古代伝承世界の不思議―」(内藤磐)が説くように、この神託は二段構成をとっているようである。すなわち、前段の「玉菱の鎮石。出雲人の祭る、真種の甘美鏡。」が主文で、後段の「押し羽振る。甘美御神、底宝、御宝主。」と「山河の水泳る御魂。静挂かる甘美御神、底宝、御宝主。」が対をなして、主文の神鏡の説明文である。

神託の主題

そして、この神託に征討譚の地の文の「止屋の淵に多に菱生ひたり」を重ねてみると、主文は次のような義に解せる。この聖地の「止屋の淵」の聖水に「多に菱生ひた」る「弥(八)つ芽(藻)差」すところの「玉菱の鎮石」(玉のような水草の中に沈んでいる石)があり、そこに

謡としては、神代記の出雲神話のなかの須佐之男の条に〈八雲立つ出雲八重垣の歌〉（記1）があり、枕詞の「八雲立つ」が「出雲」に懸かる由来譚にもなっている。すなわち、須佐之男の命が新妻の櫛名田比売と結婚して二人で住む新居を作った時に、「其の地より雲が立ち騰」ったので、その瑞祥によって次のようにうたったという。

八雲立つ 出雲八重垣。妻籠みに
八重垣作る。その八重垣を。

（八雲立つ） 出雲の八重垣。その盛んに湧き出ずる雲が、妻を籠もらせるために
宮のめぐりに八重垣を作るよ。その見事な雲の八重垣を。

（記1）

このようにこの歌謡は出雲神話に取り込まれて神話化しているけれども、この歌謡の本来の姿は独立歌謡で、新婚のための婚舎の新築を祝った祝宴歌であった。すなわち、この出雲の地に瑞雲が八重垣のように立ち騰つて妻まで籠もらせるように、妻を籠めるために出雲様式の八重垣を作る、と参列者たちは新婚夫婦が住む婚舎の完成を祝っている。

そしてその初二句だけに焦点を当ててみると、「弥（八）雲」が「立（現）つ」こと、すなわち盛んに雲が立ち現れることは瑞祥で、瑞雲の立ち籠める「出雲」は繁栄する土地である、と讃美している。

弥（八）つ芽（藻）差す出づる藻Ⅱ出雲 しかし、「出雲」に懸かる枕詞は瑞雲の「八雲」が「立（現）つ」に固定化しておらず、瑞草の「弥（八）つ芽（藻）差す」が「出づる藻」Ⅱ「出雲」へと懸かっている枕詞もある。その典型例が景行記の出雲建征討譚の〈出雲建の大刀の歌〉（記23）の初句と二句の用例であった。

土橋説として前述したように、この「やつめさす」は瑞草の水草・藻の芽が群生する「弥（八）つ芽（藻）差す」で、その「出づる藻」から「出藻」Ⅱ「出雲」を導くものだった。そして、その根拠の多くをこの崇神紀の出雲建征討譚の地の文「止屋の淵に多に菱生ひたり」「淵の水清冷し。（中略）游泳みせむ」、ならびにこの征討譚に続く小児の下した〈玉菱の鎮石出雲人の神託〉に求めている。その「止屋の淵」は神門郡の塩治郷（現出雲市）にある斐伊川下流（大川といった）にあり、記紀の出雲建征討譚の舞台になっている。

こうしてみると、崇神紀の出雲建征討譚の〈出雲建の大刀の歌〉（記20）の初二句の「八雲立つ出雲」の本来の形は、地の文の聖水の呪草（藻）と対応させて「弥（八）つ芽（藻）差す出雲」とあるべきだったろう。

五 出雲の神宝

1 〈玉菱の鎮石出雲人の神託〉

〈玉菱の鎮石出雲人の神託〉「弥（八）つ芽（藻）差す出づる藻Ⅱ出雲」説の有力な拠り所は、前述した崇神紀の出雲建征討譚の直後に記されている氷香戸辺の男児の下した〈玉菱の鎮石出雲人の神託〉にある。この条は次のとおりである。

また、兄の振根は弟の飯入根に出雲の首長としての面子を潰されているので、内心では遺恨をもっているものの、年月も経過しているのに、飯入根には兄の振根と敵対している意識はないようである。

ましてや、出雲氏の聖地の「止屋の淵に多に養生ひ」という瑞祥は、取り敢えず出雲氏になんらかの晴れがましい祭祀行為を求めるものであり、その祭祀行為のポイントの一つが「游沐み」(禊ぎ)であった、と想定できる。ナンバー2の弟の飯入根にしても、聖地の止屋の淵に行つて祭祀をしようという兄の首長の慈恵には、当然の慶事として喜んで従がつたであらう。

となると、沐浴後に首長の振根に自分の「真刀」(一族を代表する建を示す神剣ではない)を取り上げられて身の危険を感じたので、大いに慌てることになる。そこで拠所なく兄の首長「建」の神剣を手にしたものの、それが木刀だったのでまんまと騙し討ちにあったという次第である。すなわち、弟の飯入根は自分の所有する大刀を兄の振根に奪われ(交換ではない)、止むを得ず兄の所有物の木刀を手にする以外なかったのである。

こういう明確な対立・緊張感のない同族間の暗殺・騙し討ちのどこに、首長の振根の「出雲建」としての英雄らしさがあるだろうか。兄の振根は出雲氏の首長なので建前上「出雲建」ではあるけれども、それは低劣な策を弄する見掛け倒しだったので、「時の人」から「ひどいものだ」「あはれ」と痛烈に批判されることになる。

しかしだからといって、弟の飯入根が「出雲建」かという点、前述したように彼にしても「建」＝英雄といえるほどの資質・実績も認めがたい。
《出雲建の大刀の歌》の歌意 以上から、建前上歌謡のなかの「出雲建」は出雲氏の首長の振根ということになる。そして「あはれ」の語義が前後の文脈によって様々な感動を表出しているので、この歌謡の歌意は、本節の本文の条で述べたように、①従来の口語訳のほかに②③として論者(畠山)の口語訳も挙げておいた。

通説の①は、弟の飯入根を「出雲建」と讃美して、彼が騙し討ちにされたことを「あはれ」(気の毒だ)と同情している。

②は、兄の振根の所有する大刀が真剣らしく見せかけた偽物であるように、兄の振根は見掛け倒しの「出雲建」で、その騙し討ちの卑怯ぶりを「あはれ」(ひどいものだ)と批判している。

③は、「出雲建」である兄の振根の大刀は見掛け倒しの偽大刀で、それを手にせざるをえない騙し討ちにあった弟の飯入根は「あはれ」(気の毒だ)と同情している。この③は、歌謡の空白部になんか思いをめぐらしており、かなり回りくどくなっている。

こうしてみると、論者の口語訳②が最適ではなからうか。

なお余計なことながら、よしんば地の文で景行記の倭建のようにこの歌謡を勝者の兄の振根がうたったとすれば、「出雲建」である自分(振根)が所有する大刀を見掛け倒しだと自らを見下すことになる。したがってこの歌謡の歌い手として兄の振根を想定することは、決してありえない設定だ、ということになる。

5 弥(八)つ芽(藻)差す出づる藻＝出雲

八雲立つ出雲 崇神紀の《出雲建が佩ける大刀の歌》(紀20)の初句の「八雲立つ」は、二句の「出雲」に懸かる枕詞である。この二句をふくむ歌

出雲臣、天穗日命十二世孫鵜濡湊命之後也。

出雲の臣、天の穂日の命の十二世の孫・鵜濡湊の命の後なり。

とすれば、この一族の国造の立場は飯入根が死を賭して築いたことになるので、子の鵜濡湊^{うかづくぬ}Ⅱ宇迦都久奴^{うかづくぬ}が朝廷側に立つて尽力した父の飯入根^{いひりね}を国造扱いして「出雲建」の称号を追贈してもおかしくないだろう。そしてこの経緯を知っている「時の人」が、この英邁な飯入根Ⅱ出雲建が騙し討ちにあつて気の毒だと同情することはありえるだろう。

とするとこの伝承で飯入根を讃美してその無念の死を悼んだ「時の人」とは、神宝を奉獻して朝廷に服属を誓った飯入根一族を擁護する立場にある者であろう。

この点、「崇神紀・出雲振根伝承における「時人」歌謡の機能」^{〔牧野正文〕}も、従来の通説を承けて次のように説く。

この歌謡の歌詞にある「イヅモタケル」は普通名詞であり、振根・飯入根双方にあてはまる呼称といえるが、「サミナシ」が地の文との関係から「真身無し」の意と解される以上、にせの木刀をつかまされた飯入根を指すものと見なければならぬ。そしてその飯入根に対する感情として「あはれ」なる語があるわけだが、(中略) 出雲振根伝承全体の構想よりすれば、当然憐憫・同情を表すものと解されるはずである。

以上のように、出雲建征討譚全体の構想から地の文と歌との関係を見定め、飯入根が出雲建であり、「あはれ」は飯入根に対する「時の人」の憐憫である、と説いている。

再び出雲建Ⅱ振根 しかし、本文を改めて素直に読み直してみよう。「時の人」が〈出雲建の大刀の歌〉をうたったのは、飯入根一族の「鵜濡湊Ⅱ」^{うかづくぬ}「宇迦都久奴」^{うかづくぬ}が出雲の国造に任命される以前のことである。すなわち、弟の飯入根暗殺からあまり日時が経たない頃にこの歌がうたわれているので、これをうたった人が「時の人」といわれている。したがって、飯入根に「出雲建」が追賜される時間的なゆとりがないはずである。また思い直してみると、暗殺された飯入根にしても「出雲建」と称賛されるほどの勇者らしさはどこにも認められない。

そして何度も言うように、朝廷に誅殺される直前まで振根は国造なので、形ばかりだとしても彼こそ「出雲建」だったことになる。以上から、出雲建Ⅱ飯入根を唱える通説は見直されるべきであろう。

4 大刀易え説話でない

大刀易え説話でない 諸説はこの崇神紀の伝承も、兄弟による大刀易え説話ととらえている。しかし、この崇神紀の伝承は、景行記の伝承のようにそれぞれに自立しつつ対立する二大勢力を代表する二人が、由緒ある晴の場で儀礼的に建の象徴である威厳ある大刀^{たち}を易えてまで友好・和平を誓約するという状況になっていない。

発動を予想させるものがあつたようである。

そこでこの神託のことが、氷香戸^{ひかとべ}辺から皇太子^{すめみま}の活目^{いくめ}の命^{みこと}に奏上された。すると活目^{いくめ}の命^{みこと}はこの神託のことを崇神天皇に報告したところ、結句

出雲氏の祭祀が復活されている（玉妻^{たまめ}の鎮石^{しづいし}出雲人の神託）については「五 出雲の神宝」で述べる。

出雲の神宝の検定 そしてさらに、その神託を父の崇神天皇に取り次いだ活目^{いくめ}の命^{みこと}が次の垂仁天皇に即位し、その二十六年に物部^{もののべ}の連^{むすじ}の祖^{おや}・十千^{とほち}根^ねをして出雲の神宝^{かみたから}を検定させると共に、その管理もさせ、出雲氏への支配力を強化している。

以上のように書紀の伝承は、朝廷と出雲の関係を一連のものとして点綴している。

この点、ロマン性が強く、熊曾征討譚と連携して完結している景行記の出雲建征討譚とは、大きな相違を見せている。

3 出雲建は振根か飯入根か

出雲建Ⅱ出雲の国造 「ヤマトタケル伝承の成立」〔松前健〕が説くように「出雲建とは、出雲国造のことを指す呼び名であ」るだろう。とすると、歴代一人しかいない出雲の臣の国造が、この格式の高い「出雲建」を襲名していた、と考えるべきだろう。

出雲建Ⅱ振根 とすると、〈出雲建の大刀の歌〉（紀20）の「出雲建」は、神宝を管理している兄の振根でなければならないだろう。

この出雲を支配する出雲氏内部の内紛は、神宝の管理をめぐる権限とその行使のあり方にあった。古代の権力構造は祭政一致体制を採っていたので、神宝の管理は主権者にとって手放せない必須要件であった。この意味で、本来神宝を管理していた兄の振根こそ、在世中・存命中は「出雲建」の立場にあつた、というべきである。

出雲建Ⅱ飯入根 しかし、その「出雲建」の立場にある振根が朝廷の派遣した四道將軍の吉備津彦と武渟河別^{たけぬかはわ}によってあつけなく誅殺されている。そこで、当初ナンバー2であつた弟の飯入根^{いひいりね}の一族（弟の甘美韓日狹^{うましからひさ}と子の鷗濡渟^{うかくぬ}）が出雲の神宝を管理して出雲の主権者になり、出雲の国造に就任することは、大いにありえることである。

そして現に『先代旧辞本紀』卷十「国造本紀」に、次のように飯入根の子の「鷗濡渟」Ⅱ「宇迦都久奴^{うかづくぬ}」が崇神朝（瑞籬朝^{みづがき}）に出雲の国造に任命されている。

出雲国造。瑞籬御世、以^二天穗日命十一世孫・宇迦都久奴命^一、定^二賜国造^一

出雲の国造。瑞籬の御世に天の穗日の命の十一世の孫・宇迦都久奴の命を国造に定め賜ふ。

右と同じことは、『新撰姓氏録』右京神別にも次のように記されている。

たむ。何を恐みか、輒く神宝を許しし」といふ。

止屋の淵での祭祀 是を以て、既に年月を経れども、猶恨忿を懷きて、弟を殺さむといふ志有り。仍りて弟を欺きて曰く、「頃者、止屋の淵に多に養生ひたり。願はくは共に行きて見欲し」といふ。則ち兄に随ひて往く。是より先に、兄竊に木刀を作れり。形真刀に似る。當時自ら佩けり。弟真刀を佩けり。共に淵の頭に到りて、兄の弟に謂りて曰はく、「淵の水清冷し。願はくは共に游泳みせむと欲ふ」といふ。弟、兄の言に従ひて、各佩かせる刀を解きて、淵の辺に置きて、水中に沐む。

飯入根の騙し討ち 乃ち兄先に陸に上りて、弟の真刀を取りて自ら佩く。後に弟驚きて兄の木刀を取る。共に相撃つ。弟、木刀を抜くこと得ず。兄、弟の飯入根を撃ちて殺しつ。

〈出雲建の大刀の歌〉故、時の人、歌して曰はく、

八雲立つ 出雲建が 佩ける大刀、黒葛多巻き さ身無しにあはれ。

(紀20)

① (八雲立つ) 出雲建 飯入根が 腰につけていた大刀は、その鞘に黒葛をたくさん巻いて立派だけれども、中身の刀身がなくてあゝ気の毒だ。

② (八雲立つ) 出雲建 振根が 腰につけていた大刀は、その鞘に黒葛をたくさん巻いて立派だけれども、中身の刀身がなくて(その見掛け倒しの汚

いやり方は) ああひどいものだ。

③ (八雲立つ) 出雲建 振根が 腰につけていた大刀は、その鞘に黒葛をたくさん巻いて立派だけれども、中身の刀身がなくて(それでその偽大刀を手にはせざるをえないままに騙し討ちにされた飯入根は) ああ気の毒だ。

振根の誅殺 是に、甘美韓日狹・鸕濡淳、朝廷に参向でて、曲に其の状を奏す。則ち吉備津彦と武渟河別とを遣して、出雲の振根を誅す。

2 服属伝承

祭祀権の弱体化と出雲の内紛 出雲氏の内紛のきっかけは、大和朝廷が出雲氏の神宝を奉獻させて、祭祀を基盤にした出雲氏の首長 出雲建の支配力を弱体化させる施策にあった。出雲氏の首長 出雲建である振根はその神宝を管理する最高司祭者でもあったけれども、その留守中にナンバー2の弟飯入根(ならびにその弟甘美韓日狹と子鸕濡淳など)によってその権限が侵害され、朝廷の要求どおりに出雲氏の神宝が奉獻されてしまった。そこで首長の振根は弟の飯入根に遺恨を抱き、一族の聖地で騙し討ちにするという内紛が生じた。

一連の服属伝承 この崇神紀の出雲建征討譚を皮切りにして、以下、出雲氏が大和王権に服属していった経緯が次々と語られている。

振根の誅殺 すなわち、右の弟の飯入根が暗殺された顛末は、甘美韓日狹と鸕濡淳によって朝廷に訴えられ、それで朝廷は四道將軍のうちの二人の將軍(吉備津彦と武渟河別)を派遣して、出雲氏の首長の振根を誅殺している。

出雲の祭祀の中絶 そして、この朝廷を巻き込んだ氏族の内紛の衝撃は大きく、それで出雲の大神の祭りが中絶せざるをえなくなった。

〈玉菱の鎮石出雲人の神託〉 そこでこの出雲内の混沌状態に起因する不安・動揺に基づくと思われる〈玉菱の鎮石出雲人の神託〉が、丹波の氷上の人・氷香戸辺の男児の口から発せられている。その神託の内容は難解であるものの、祭られない神の荒御霊(物事に対して荒々しく活動する神霊)の

大刀易えの重さ とすれば、建・勇者同志が友好の徴として「大刀易へ」をすることの意義がいかに勇者の生命と名誉を懸けた重要な儀礼だったかがわかる。

大刀を失った倭建の末路 そして、この重い意義をもつ「大刀易へ」の儀礼を仇で返した倭建の英雄的行為（騙し討ち？）は、巡りめぐって、東征において伊勢神宮の最高神女・倭比売から賜った神剣の「草那芸の剣」を手放して尾張の美夜受比売の許に置いたばかりに、死の彷徨をすることになる。

そしていよいよ崩御する時に、次の〈つるぎの大刀の歌〉（記34）を辞世歌としてうたっている。

嬢子の 床の辺に 我が置きし
つるぎの大刀。 その大刀はや。

乙女の 床のあたりに 私が置いてきた
大刀。 ああその大刀よ。

（記33）

建の証しである「大刀」が因になってそれに見合った応報をもたらしているのが、倭建も自らの建の根源である大刀を手放して景行記の出雲建と同じ悲劇的な運命を辿ったことになる。古代の建たちの宿命は、神剣の有無をめぐってかほどに厳しくもあり儚くもあった。

建の証しⅡ神剣の所持 神剣によって神の加護を得る建たちにとっては、神剣を手放さず、かつ他の建たちの神剣を入手して繁栄する以外に生き延びる道はなかったのである。倭建が神剣を手放したことをうたう〈つるぎの大刀の歌〉（記34）を辞世歌にし、出雲建が神剣を手放したことをうたう〈出雲建の大刀の歌〉で最期を迎えたことは、古代の建Ⅱ英雄たちの存立しえるのはただ一点、神剣の所持にだけあったことを示しているよう。

四 崇神紀の出雲建征討譚

1 本文

本文 崇神紀六十年の条の出雲建征討譚の本文は、次のとおりである。なお、歌謡の口語訳のうち、①は通説、②③は私訳である。

朝廷の要求 六十年の秋七月の丙申の朔己酉に、群臣に詔して曰はく、「武日照の命（一）に云はく、武夷鳥といふ。又云はく、天夷鳥いふ。の、天より将ち来れる神宝を、出雲の大神の宮に蔵む。是を見欲し」とのたまふ。則ち矢田部の造の遠祖武諸隅（一書に云はく、一名は太母隅といふ。）を遣して献らしむ。

飯入根の神宝奉献 是の時に当りて、出雲の臣の遠祖出雲の振根、神宝を主れり。是に筑紫の国に往りて、遇はず。その弟飯入根、則ち皇命を被りて、神宝を以て、弟甘美韓日狭と子鸕濡淳とに付けて貢り上ぐ。

振根の怒り 既にして出雲の振根、筑紫より還り来きて、神宝を朝廷に献りつといふことを聞きて、其の弟飯入根を責めて曰はく、「数日待

この名宣りの前半では、由緒正しい宮都を構えて広大な「大八島国」を統治なさる偉大なる景行天皇の御子の「倭男具那の王」だ、と述べる。すなわち、威厳をもって全国を堂々と支配している父天皇を持ち上げ、その子である、と自分の素姓・血統の尊さを誇っている。それは、正にロイヤルの気位の高さを体現する見事な自己紹介といふべきである。

ところが後半部では、熊曾建を二人称の蔑称の「おれ」を二度も用いて貶め、突如ヤクザ風のペランメー調になる。

「おれ」は元来一人称の「己」で、これが二人称になるとなぜか相手を見下した蔑称になる。似た例として、二人称の蔑称の「おんどりや」「手前」「おのれ」も、相手を低く見た喧嘩ことばになっているけれども、その素は一人称の「己等」「手前」「己」である。

このようにロイヤルらしい名宣りに次いで、このヤクザことばの「おれ」を二度も用いて勇者の熊曾建を罵倒するのは、「童女」(神女)がロイヤルヤクザの「建」に変換することと同質のもので、ここでも百八十度のどんでん返しが行われている。

祭場での騙し討ち 以上の熊曾建征討譚のあり方は、出雲建征討譚と相似形をなしている。熊曾建征討譚は、立場の上下を基本にした服属・被服属の関係を誓う祭場を物語のクライマックスに用いている。これに対して、出雲建征討譚は立場の対等を基本にした友好の関係を誓う祭場を物語のクライマックスに用いている。このように上下と対等の相違があるけれども、祭という晴の場を物語の場にしている点で共通している。そして、この二つの征討譚の土壇場で大逆転の騙し討ちをしている点でも、共通している。

ロイヤルヤクザ 以上、この二つの征討譚の主役を務める倭建は、いずれもロイヤルヤクザぶりを十二分に発揮している。すなわち、熊曾建征討譚では、熊曾建の殺害法にロイヤルとヤクザの二流を交えており、その名宣りもロイヤルとヤクザで構成されている。これに対して、出雲建征討譚でも地の文の前半部と後半部、ならびに〈出雲建の大刀の歌〉の初句から四句と結句も、明確にロイヤルとヤクザで構成されている。

以上の倭建のもつロイヤルヤクザぶりは景行記にだけある特徴で、倭建の登場しない崇神紀の出雲建征討譚には認められないものである。

余裕を見せた西征 右の出雲建征討は、父・景行天皇から命じられたことではなかった。それなのに行き掛けの駄賃とばかりに、倭建は西国の雄である出雲建の征討を手際よく易々と片付け、まんまと計略に嵌って誅殺された出雲建を嘲笑する歌までうたう余裕を見せて凱旋し、天皇に「覆奏し」ている。この弱みのかけらもみせない子の倭建の威勢のよさに、父・景行天皇の当初の思惑が外れ、大いに「惶」んだらう。

このことから、倭建が帰京して「未だ幾時も経ぬに、軍衆をも賜はずて、今更に東の方十二道の悪しき人等を平げに遣はす」ことになったらう。

2 大刀と英雄

大刀の有無による建の命運 景行記の倭建が出雲建から騙し取った大刀は、倭建の所有物になったらう。

そしてそのような神剣を数多く所有する者は、それらによって限らない栄光・繁栄が保証されたはずである。そうであればこそ大和朝廷は、神剣は素より、各種の神宝の奉獻を各地の建たちに執拗に要請していた。

これを逆から言い換えると、建としての身の証しになる大刀・神剣を失う者は、出雲建のようにその權威を失墜し、その存在すらありえないことを意味していよう。

姿を見せないの、小碓に対して兄の大碓に「未だ誨へず有りや」と問うていることからわかる。しかし小碓にしてみれば、天皇が命令を下した時点では、どちらとも理解できるものであった。そして、ヤクザ的な性情を生来もっていた小碓は、天皇とは大和王権の威厳を傷つける反逆者を許さない絶対的・親分的な存在であると認識し、無断で会食に欠席しつづける大碓への対応についてなした天皇の発言・「勞ぎ教へ覺せ」を、王権に対する義務違反をした者には断固たる処罰をせよという命令と理解した。そして、大碓に対してヤクザ的な最高級の「勞い方」をし、王権を蔑ろにすることの罪深さをよくよく「教へ覺」したわけである。

ロイヤルの一員である小碓のヤクザ的な特異な性情・異能は、このようにまず宮廷内の日常の厠という場において遺憾なく発揮されている。

熊曾建征討

父・景行天皇は我が子ながら状況判断を素早く下して勇猛果敢に行動することは素より、それ以上にそのヤクザ的な言語感覚をもつ「建く荒き情を惶み」、都から彼を遠ざけるためにも、九州南部の「熊曾建」二人の征討を命じる。こうして宮廷内で勇者の資質を見せた小碓は、「倭男具那の王」(皇族少年將軍の尊称か)として西征の途に就くことになる。

服属を誓う晴の場

以上のように倭を冠する公的な將軍ともなれば、厠などという日常(藝)の生活の場で敵対する建を誅殺することはありえなくなる。そこで熊曾建征討は、熊曾建が司祭者として執り行つた「御室楽」(恐らく新嘗祭に伴つた儀礼)という晴の場を選ぶことになる。

この「御室楽」は熊曾建の支配する地から「女子」(神女)を通じて供物(収穫された穀物など)を奉獻する場であり、その中の神女から「宴」の主催者＝熊曾建に御酒を勧め、かつ一夜妻を務める者が選ばれていたようである。そこで、倭建は大和朝廷の最高神女の叔母にあたる「倭比売の命」から賜つた「御衣御裳」(神衣装)を着て大和朝廷の「童女」(神女)に変身する。そして、その他の大勢の「女子」(神女)たちに交じって熊曾建に服属する祭祀儀礼に参列したところ、その美形を熊曾建が「見感でて」勸酒者・一夜妻に選定し、酒宴では盛んに建たちに勧酒させていた。このようにこの「御室楽」は、熊曾建にとって一年間で最も晴れがましい英姿を見せられる場であった。

対照的な騙し討ち

ところが、宴が最高潮に達した時に、倭男具那の王は劍を抜いて二人の建を騙し討ちに行っている。まず兄の建を勇者らしい扱いをして、「熊曾の衣の衿を取りて、劍を其の胸から刺し通し」て誅殺している。次いで、弟建にはこれと対照的に屈辱的な扱い方をし、「其の背の皮を取りて、劍を尻より刺し通し」、「熱瓜の如振り析きて殺し」ている。

こうしてみると、二人の熊曾建の殺害のし方に、前者のロイヤルらしい殺し方と後者のヤクザ的な殺し方の二つが併存している、とわかる。この後者の殺害法は、宮廷内で兄の大碓の命を厠で殺害したことで通底している。

名告りの二面性

その後、倭建は臨終間際の弟建から何者かと問われ、次のように名宣りをし、ここでもロイヤルヤクザぶりを遺憾なく発揮している。

吾は纏向の日代の宮に坐しまして、大八島国知らしめす大帶日子淤斯呂和氣の天皇の御子、名は倭男具那の王ぞ。
おれ熊曾建、伏はず礼無しと聞し看して、おれを取殺れと詔りたまひて遣はせり。

以上の四句までは、祭を背景にした出雲建の雄姿と、その腰に佩いている見事な大刀によってその英姿を誇る内容になっている。このように四句までは、倭建の友好の申し入れを喜んで信じた出雲建の勇者ぶりが宣揚されている。

嘲笑の「あはれ」 ところが、結句は地の文の騙し討ちを反映し、肝腎の中身の刀身がなくてああおかしいと嘲笑している。

『時代別国語大辞典上代編』の「あはれ」「何怜」(感)の項には、「強い感動の表出。喜びにも哀しみにもいう」とある。また「哀傷表現の系譜——「はや」「はも」「あはれ」——」(津田大樹)も、記紀歌謡の「あはれ」の7例、万葉歌の「あはれ」の8例を対象にして考察し、「意味の分化しない、深い詠嘆の表現」だ、と結論づけている。したがって「あはれ」は、それぞれの地の文の文脈によってその強い感動・詠嘆の義が決定されることになり、倭建のうたつた〈出雲建の大刀の歌〉の場合は嘲笑になっている。

こうしてみるとこの歌謡の上四句は、建＝英雄同志の友好関係を結ぶ場にあわせて、相手の出雲建の英姿を祭祀に支えられた勇者の偉大さを讃美した晴れがましいものであるのに対して、結句だけは偽大刀による騙し討ちにふさわしく、それらの讃美を百八十度逆転させ、出雲建が単なる見掛け倒し、中身の無い暗愚にすぎないとした、痛烈な罵倒・せせら笑いになっている。すなわちこの歌謡の構造・組み立ては、地の文でぎりぎりまで出雲建を持ち挙げておきながら、最後の土壇場でなんの容赦もなく暗殺するのみならず、嘲笑いまですること、見事に対応していることになる。

三 ロイヤルヤクザ

1 晴の場とロイヤルヤクザ

廁での「労ぐ」 次に、倭建の西征の一環として位置する出雲建征討譚では、その前に位置する熊曾建征討譚と構想が共通しているようである。そこで、この二つの征討譚を比較してみる。熊曾建征討譚についての筆者(畠山)の考察は、「倭建命の熊曾征討物語の生成(上)(下)」で詳述しているが、論の展開上、一部重複することをお許し願いたい。

倭建が小碓の命と称していた少年の頃のことである。当時、皇族は天皇の催す朝夕二度の会食に列席する義務を負っていた。しかし兄の大碓の命は、その食事に無断で長期にわたって欠席し続けていた。そこで父の景行天皇は、小碓に「何とかも汝の兄は朝夕の大御食に参出来ざる。専ら汝勞ぎ教へ覚せ」と命じた。すると小碓は、この天皇のことは「王権に逆らう大碓を誅殺せよ」と解して、早朝に用便に來た兄皇子を廁で四肢(両手と両脚)を「引き闕きて、薦に裹みて投げ棄」つという残酷な殺し方をしている。

ヤクザことば この天皇の命令のうちの「労ぐ」は頑なになっている大碓の心を安め和らげる義であるけれども、『古事記注釈三』(西郷信綱)によると、この「労ぐ」はヤクザことばとして用いられると、ボコボコに痛めつける義になってしまふ。小碓は天皇の命令を後者のヤクザことばの義で理解し、用便を足す日常の場で、怪力を發揮して四肢をもぎ取り、ごみ同様に容赦なく捨て去るといふ、ヤクザ的な殺害行為をしたのである。

父天皇の命令の意図が大碓の心を和めて朝夕の食事に列席させるように「勞ぎ教へ覚」すことにあったことは、五日経っても大碓が食事に

この襖ぎでの殺害は、出雲氏側にしてみれば予想外の展開で、神前での誓いの場は神をも恐れぬ狼藉で騒然としたろう。

3 地の文と歌謡の対応

地の文と歌謡の対応 こうした騒然としたなかで倭建がうたつた〈出雲建の大刀の歌〉（韻文）は、以上の出雲建征討の地の文（散文）と実によく対応している

弥（八）つ芽（藻）差す出づる藻Ⅱ出雲 歌謡の初句の「やつめさす」は、「出雲」に懸かる枕詞である。『古代歌謡全注釈—古事記編—』（土橋寛）は「やつめさす」が「八雲立つ」の音韻変化とする従来の説に異を唱え、「やつめさす」は瑞草の水草・藻の芽がたくさん生える義の「弥つ芽（藻）差す」か、または「八つ芽（藻）差す」かで、それが「出づる藻」Ⅱ「出雲」に懸かる、と説いている。なお、「弥つ芽差す」の「藻」は「藻」の音韻変化である。

差す そして、「さす」は「差す」「生す」で、葉や枝や根が伸びる、生える義であることは、次の用例からわかる。

く出で立ち 百枝楓の木、
こちこちに 枝差せる如く

く出で立ちの 百枝楓の木の
あちらこちらに 枝は生え伸びているように

（万二一213、泣血哀慟歌）

肥河の聖地の反映 とすると、「弥（八）つ芽（藻）差す」（たくさんの芽（藻）が生える）Ⅱ「出づる藻」とは、この歌謡が詠まれた肥河の聖地を反映している、と考えられる。そのことは、これと同じ場が崇神紀の出雲建征討譚にもあり、そこでは「止屋の淵に多に菱生ひ」とあることからわかる。

厳藻 なお『古代の出雲』『水野裕』は、「出雲」の地名は、斐伊川下流の低湿地帯から作られた「止屋の淵」に生える川藻を神聖視する信仰から、その「厳藻」に由来する、と説く。この「厳藻Ⅱ出雲」説は、出雲氏の祭祀の核心を衝いていて、とても魅力的である。

しかし、イツとイツには清濁の別があり、また枕詞の「弥（八）つ芽（藻）差す」の「差す」（生える義）を有効に用いるとすると、「厳藻」Ⅱ「出雲」とするよりは、「出づる藻」Ⅱ「出雲」の方が自然なようである。

出づる藻Ⅱ出雲十建 そして、この聖なる水藻の「差す」（生える）聖域こそが、祭政一致体制を執る出雲建の「祭」の側面を支える源泉であったろう。ここに登場する出雲建は倭建の友好の申し出を信じ、自らの信仰の基盤である水藻の繁茂する聖地を和平の誓約の場にしたのである。

そして「四 崇神紀の出雲建征討譚」と「八 〈出雲建の大刀の歌〉の原形」で後述するように、歴代の「出雲建」はこの瑞々しい水藻の芽が盛んに生える聖地で誕生・就任していたので、「弥（八）つ芽（藻）差す出づる藻Ⅱ出雲の建」と称賛された、と考えられる。

佩ける大刀黒葛多巻き 地の文には歌謡の四句の「黒葛多巻き」に相当する文言はないけれども、この句は出雲建の佩ける大刀の威厳のほどを誇示している（「黒葛多巻き」については「八 〈出雲建の大刀の歌〉の原形」で後述）。

2 友好と騙し討ち

覇を競う建たち「出雲建」は出雲の国の勇者のことである。この景行記の出雲建征討譚の前にある熊曾建征討譚で、南九州の熊曾の勇者として二人の「熊曾建」がいた。これらの建たちは英雄時代の雄であって、この時代はどのような建たち（例えば播磨建・常陸建とか）が全国各地に群雄割拠していた。したがって、彼らが支配・被支配の関係を築く以前は、その国々には歴代の建が常に一人はいて、その首長の座は、幾多の交代劇・内紛を演じながら継承されていただろう。崇神紀の出雲建征討譚はその典型で、兄の振根と弟の飯入根一族による出雲建の交代劇であった。そして、その交代劇に乗じて大和朝廷がさまざまに介入し、次第に服属・被服属の関係を強化していったろう。

武蔵の国造一族の内紛 同様の例として、安閑紀元年（五三四年）の条に武蔵の国造一族の内紛が記されている。そのあらましは次のとおりである。

武蔵の国造である笠原の直使主と同族の小杵とが、国造の職をめぐって相争って何年間も決着が着かなかった。小杵は気性が荒くて高慢で反逆心があったので、密かに上毛野の君小熊に援助を求め、使主を殺害しようとした。それを知った使主は逃げて上京し、朝廷にそのことを訴えた。そこで朝廷は使主を国造に任命し、小杵を誅殺した。使主は喜びに溢れ、四か所の屯倉を朝廷に献上した。

この内紛は朝廷の裁定によって使主が国造の地位を確保しているものの、朝廷の軍事介入もあって朝廷の武蔵の国への影響力は増大し、また朝廷に対して屯倉を献上して朝廷への隷属の度合いを深めている。

こうして各国造たち・建たちは様々な闘争と和平を繰り返して、次第に大和朝廷・大和の建に制圧されていったろう。

友好の二つの証し この点、景行記の出雲建征討譚では倭建は対等の関係を保つ「結友」＝友好を出雲建に申し入れ、受け入れられている。そのために、次の二点で友好の証しを立てようとしている。

まず①「肥河に沐」しているのは、今までの疑惑に満ちた蟠りを聖水の湧き出る聖地での禊ぎによって「水に流す」ためであろう。そして、②二人の建が己の権威の象徴である「大刀」を「易」ているのも、英雄＝建同志の「結友」の証しであった。したがって大刀を交換すれば、交換された大刀がそれぞれに相手の所有物になる。そして『記伝』が「刀易」には刀合わせの意味も含むと説くのは、けだし正しいだろう。すなわち、「爾に各」交換された大刀を己の所有物として、武威を誇る勇者らしく儀礼的に一・二度ほど「刀合わせ」をして、勇者に二言がないと友好の誓いを立てたものであろう。

騙し討ち しかし倭建は騙し討ちを図り、赤禱で本物そっくりの木刀を作り、①水浴＝禊ぎの後の②「刀易」の儀礼で、偽大刀（木刀）を手にした出雲建を「刀合わせ」の段であっさり打ち殺している。

丸腰状態 ①の水浴＝禊ぎは素つ裸であるもので、いわゆる丸腰状態である。この禊ぎでの殺害は、兄殺しの場である厠と同様に、殺される者はいずれも無防備である。この意味で禊ぎで川から上がる時に後れをとった出雲建は、端から受け身に立たざるをえなかった。

本論のねらい 以上、本論はまず二つの出雲建征討譚の構造を見極めたい。

そして、出雲の国の神権の源泉である「弥(八)つ芽(藻)差す」^{いづもたける}「出づる藻」(繁茂する聖なる藻)の存在する聖水の祭場で、歴代一人の「出雲建」^{いづもたける}「出雲の英雄・支配者が誕生・即位し、そこでその出雲建の大刀によって出雲に幸をもたらすと呪禱する独立歌謡がうたわれたろう」と述べたい。

そして崇神紀の出雲建征討譚は、この水辺の祭祀の場であられた独立した儀礼歌のうち「鏑」を「さ身」^{さみ}に変え、出雲の神宝の帰属・管理をめぐる出雲国内の内紛劇で「時の人」^{とき}が出雲建の卑劣さ・見掛け倒しを批判する物語歌謡として転用し、出雲氏の勢力交替を通じて出雲が大和朝廷に服属していった歴史的な闘争を語っている、と述べたい。

そして、景行記の倭建の出雲建征討譚は、崇神紀の伝承のうち聖地での騙し討ちの条(地の文と〈出雲建の大刀の歌〉を巧みに組み替えて、倭建伝承の一環として仕立て直し、倭建が出雲建を英雄として遇しながらも最後にその間抜けぶりを嘲笑する物語歌謡として用い、出雲の服属が大和朝廷によって完膚なきまで貫徹されたことをロマン性豊かに語っている、と述べてみたい。

二 景行記の出雲建征討譚

1 本文

本文 景行記の出雲建征討譚の本文は、次のとおりである。なお以下の本文の小見出しは、論者(畠山)が理解の便宜上付したものである。

友好と殺害 即ち出雲の国に入り坐して、其の出雲建を殺さむと欲ほして、到ります即ち結友したまひき。故、窃に赤禱以ちて詐の刀を作り、御佩と為て、共に肥河に沐したまひき。

大刀易え 爾に倭建の命、河より先に上りまして、出雲建の解き置ける横刀を取り佩きて、「刀易為む」と詔りたまひき。故、後に出雲建、河より上りて、倭建の命の詐の刀を佩きき。是に倭建の命、「いざ刀合はさむ」と詔へて云りたまひき。爾に各其の刀を抜く時、出雲建、詐の刀を得抜かざりき。即ち倭建の命、その刀を抜きて、出雲建を打ち殺したまひき。

〈出雲建の大刀の歌〉 爾に御歌に曰りたまはく、

弥(八)つ芽(藻)差す 出雲建が 佩ける大刀、 (弥(八)つ芽(藻)差す) 出雲建が 腰につけていた大刀は、

黒葛多巻き さ身無しにあはれ。 其の鞘に葛をたくさん巻いて立派だけれども、中身の刀身がなくてああおかし。

(記23)

平をもたらずと予祝する呪縛歌であった、と考えている。

霊剣讚美とする諸説 『稜威言別』〔橘守部〕卷三によると「み」は「び」にも通じるとして、次のように説いている。

さすがに出雲建と呼ぶる、者の、佩たる大刀ほどありて、葛蔓多纏、堅固製れるのみならず、身に錆びと処居ずして、可憐鋭利刀なるかもとなり。

すなわち、結句の「さみなし」は「錆無し」であり、この歌謡は鞘は素より、中身の刃も鉄錆がない切れ味のいい大刀であることを讚美しているという。こうして、出雲建Ⅱ飯入根から騙し取った剣を讚めているという。

また『記紀歌謡全註解』〔相磯貞三〕は『稜威言別』説を認めつつ、霊剣讚美の民謡風の歌が原形で、これが記紀に転用された、と説いている。

守屋論と野津論 また「出雲建が佩ける刀」「守屋俊彦」はこれらの説を承け、〈出雲建の大刀の歌〉の原形が出雲氏の祭祀の場でうたわれた儀礼歌である、と論じた。

そしてこの守屋論を承けて、「出雲建が佩ける大刀」小論「野津将史」は、「この歌は、出雲に伝えられた、出雲産の名刀・霊剣を称える歌謡で、(中略)その原義は、出雲の勇者が持つている大刀が立派であるということを抱めるものである」と説く。

そして守屋論・野津論は、原出雲振根伝承が出雲特有の首長の神聖な禊を伝えた伝承であった、とも説いている。とくに守屋は、この〈出雲建の大刀の歌〉の原形が基本的に、出雲氏の霊地である止屋の淵で執行された出雲氏の首長の就任式でうたわれたと説くのは、瞠目すべきことである。小野論 この点、「出雲の掌握と刀剣讚美」「さみなし」の歌の解釈から「小野諒巳」は、『稜威言別』の説を継承して〈出雲建の大刀の歌〉(記23)が騙し討ちに遭った出雲建の所有していた木刀Ⅱ「詐の刀」を倭建が皮肉って讚美している、と解して注目される。その解釈が、景行記の出雲建征討譚の基本的な構想・構造にそれなりに合致していることは、「九 下降する〈出雲建の大刀の歌〉」で後述する。

〈出雲建の大刀の歌〉の原形の復原 こうしてみると、〈出雲建の大刀の歌〉の原形は次のように復原できようである。

弥(や)つ芽(め)差す 出雲建が 佩ける大刀は、
黒葛多巻き 錆無しにあはれ。 (弥(や)つ芽(め)差す) 出雲建が 腰につけている大刀は、
その鞘に黒葛をたくさん巻き 鉄錆もなく立派なことよ。(したがって、その霊験もあらたかである)

本論は右の言別説をはじめとする守屋論と野津論を若干批判しつつも、基本的にほぼ是認し、それを敷衍するもので、この歌謡が本来水の聖地で執り行う祭祀で歴代の出雲建の所持する霊剣を讚美する独立歌謡であった、と考える。

そして前述したように、この歌謡は出雲建の神剣を単に讚美するのみならず、その出雲建の神剣を讚美することによって、出雲の国土に豊穡をもたらし、また民に治癒・蘇生をもたらし、そして出雲に治平をもたらしことを予祝・呪縛している、と考える。

帰郷した振根は自分の管理する神宝が既に献上されていたと聞き、弟の飯入根に対して「数日待つべきだった。何を恐れて容易く神宝を献上したのか」と責めた。

それから年月が経っても振根の怒りは静まらず、弟を殺害しようとした。そこで飯入根を欺いて、「止屋の淵（斐伊川の下流）にたくさん藻が生えたので、共に見に行こう」と誘った。そして兄の振根は本物の大刀らしく木刀を作り、それから水浴に誘った。二人が水浴した後、兄が先に陸に上がって弟の真大刀を佩いた。驚いた弟は拠所なく兄の木刀を執った。そして二人は相戦った。しかし木刀では勝負にならず、振根に騙し討ちにされる。

そこで「時の人」が騙し討ちにされた飯入根に同情して次のような〈出雲建の大刀の歌〉（紀20）をうたった。なお、飯入根への同情と解したこの歌謡の口語訳は、一応通説に従った。

八雲立つ 出雲建が 佩ける大刀、
黒葛多巻き さ身無しにあはれ。

（八雲立つ） 出雲建 飯入根が 腰につけている大刀は、
その鞘に黒葛をたくさん巻いて立派だけれども、中身の刀身が無くてああ気の毒だ。

（紀20）

そこで、右の異常事態を甘美韓日狹と鵬濡淳が大和朝廷に訴え出たところ、朝廷は吉備津彦と武淳河別を派遣して、振根を誅殺した。

2 本論のねらい

生成の順 右のように類似した二つの出雲建征討譚が生成・成立した順・影響関係はどうなっているだろうか。これは誰しもが抱きやすい疑問である。通説では、歴史的な背景を濃厚に反映している崇神紀の伝承が古く、ロマン性・物語性が強い景行記の伝承がそれを踏まえて生成された、ととらえているようである。論者（畠山）もこれに従いたい、と思っている。

構造の把握 しかしそれ以前に、両伝承の背景を考慮し、本文を正確に押さえながら、その構造を的確に把握したい。

物語歌謡か独立歌謡か また地の文・ストーリーだけでなく、歌謡もほぼ同一で、初句の「出雲」に懸かる枕詞が「弥（八）つ芽（藻）差す」（「差す」は生える義）か「八雲立つ」かの相違しかないほどに酷似している。

このほとんど同じ歌謡が、はたしてこの征討譚のために作られた、いわゆる物語歌謡（創作歌謡）なのか、それとも本来なんらかの公的な儀礼の場でうたわれた独立歌謡で、それがこの征討譚に物語歌謡として転用されたものなのか、という問題もある。

出雲に幸をもたらず大刀の讚美 例えば、『古事記』『西宮一民』は「この歌は物語歌としてつくられたものとみてよい」と説き、『古事記・上代歌謡』[萩原浅男・鴻巣隼雄]は「この歌は『出雲建』というような人名があるところから物語歌として作られたものであろう」と説いている。

しかし、論者（畠山）はこの〈出雲建の大刀の歌〉は本来独立歌謡で、歴代の出雲の支配者（国造など）を「出雲建」と讚美し、その腰に佩びる大刀の素晴らしさを「あはれ」（見事だ）と讚美し、その大刀の呪能によって出雲の大地に豊穡をもたらし、民に治癒・蘇生をもたらし、国土に治

出雲建征討譚考 — 〈出雲建の大刀の歌〉の生成—

畠 山 篤

一 はじめに

1 梗概

二つの出雲建征討譚 出雲建征討譚には二つあり、それは『古事記』景行天皇の条Ⅱ景行記に倭建の命の西征譚の一環として、そして『日本書紀』の崇神天皇の条Ⅱ崇神紀六十年の項に出雲が大和王権に服属することを語る伝承の一環として、それぞれ記されている。その内実は、きわめて類似しつつ異なっている。

まず、この二つの出雲建征討譚の梗概を述べてみる。

景行記の出雲建征討譚 景行記では、倭建の命が南九州の英雄の熊曾建を征討した後に、出雲の国の英雄の出雲建を征討している。そのあらましは、およそ次のとおりである。

倭建は出雲建と対等な和平関係を結ぶと見せかけ、赤檣の木で本物らしく木刀を作る。そして互いが所持する大刀を交換し、それから肥河で水浴（視ぎ）をし、その上で大刀合わせをした。しかし出雲建は刀身を抜きえず、その彼を倭建は出雲建の大刀を抜いて征討した。

そして、倭建は次のような〈出雲建の大刀の歌〉（記23）をうたって、建とは名前ばかりの見掛け倒しの「出雲建」の間抜けぶりを「あはれ」（あおかし）と嘲笑している。

弥（八）つ芽（藻）差す 出雲建が 佩ける大刀、
黒葛多巻き さ身無しにあはれ。

（弥（八）つ芽（藻）差す） 出雲建が 腰につけている大刀は、
その鞘に葛をたくさん巻いて立派だけれども、中身の刀身がなくてあおかし。（記23）

崇神紀の出雲建征討譚 崇神紀六十年の項の出雲建征討譚は、大和朝廷が出雲の神宝を献上させる話の一環で、出雲の国の内紛として語られている。そのあらましは、およそ次のとおりである。

崇神天皇が「武日照の命が天から将来して出雲の大神の宮に収めてある神宝を見たい」と述べ、それを承けて武諸隅が出雲に遣わされた。

この時、その神宝を管理していたのは、出雲氏の首長の振根であった。しかしその時、彼は筑紫に出張っていたので、振根の弟の飯入根がさらに年下の弟の甘美韓日狹と自分の子の鷗濡淳を使者にして神宝を朝廷側に献上した。